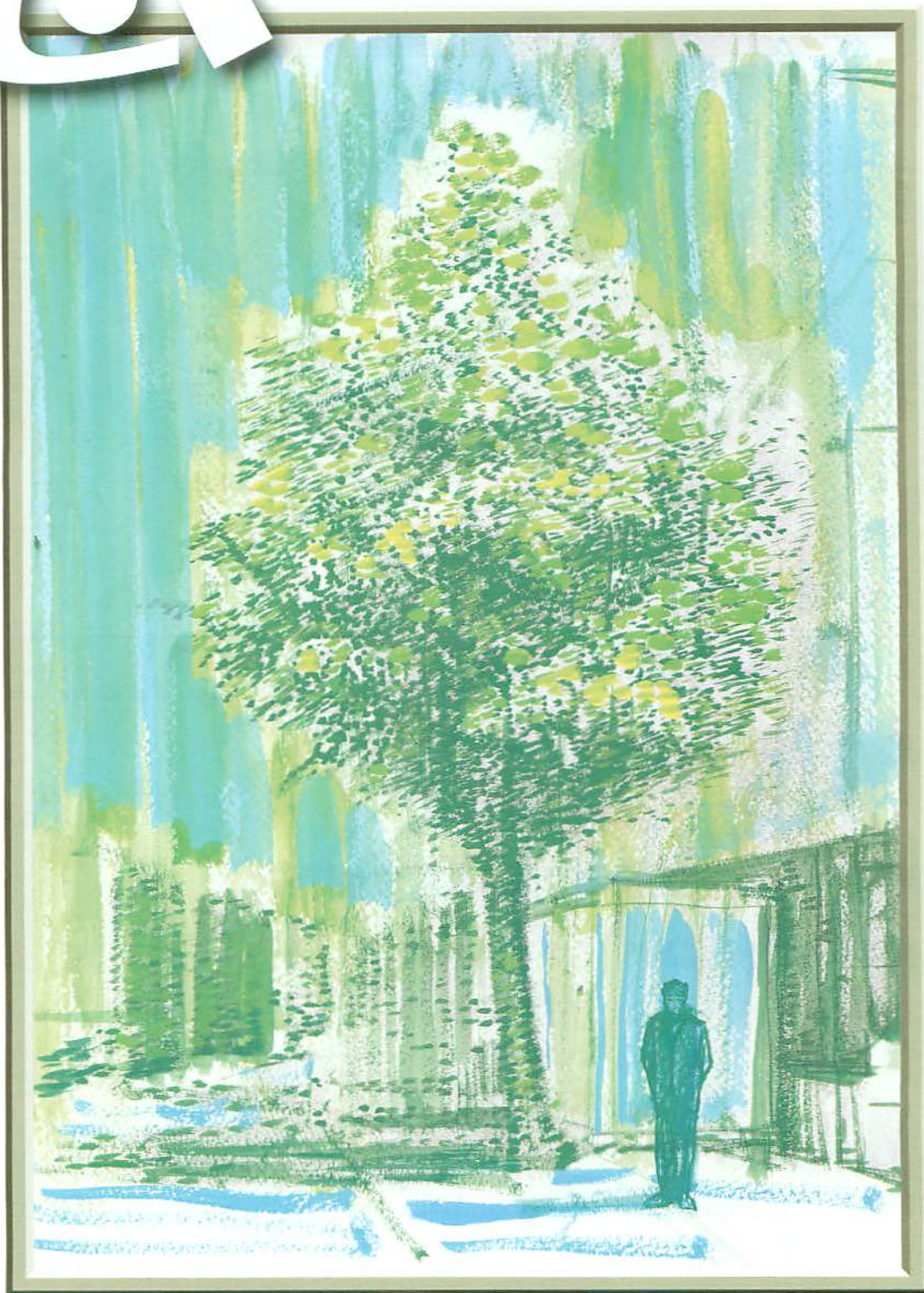


窓

m a d o



福島県教育センター

◇ 「新しい学校づくりをめざして」

～開かれた学校、今、学校に求められるもの～

特別寄稿 時代を捉え自らの錬磨を 社団法人 郡山法人会会長 門馬真澄氏…… 1

◇ 「は・っ・し・ん」 ～センターは 今！～

- ☆ 学校評価システムの構築と学校改善 教育センター学校評価研究チーム…………… 5
- ☆ 思考過程を重視したきめ細かな指導を充実させるための工夫
教育センターカリキュラム研究チーム…………… 8
- ☆ 「教育用コンテンツを活用した授業実践モデルの開発と研究」
教育センター情報活用研究チーム…………… 11
- ☆ 教育調査の実施状況 教育センター教育調査チーム…………… 14
- ☆ ライフ・ステージの課題に沿った研修をめざして 教育センター企画振興チーム…………… 16
- ☆ 性に関する指導は十分ですか？ 教育センター教育相談チーム…………… 18
- ☆ 授業にコンピュータを活用してみませんか 教育センター情報教育チーム…………… 22

◇ 「人・道・歩み」

「自家焙煎珈琲 椋久里」店主 市澤 秀耕氏に聞く …………… 24

◇ 豊かな教育実践

- ☆ 普通の授業でパソコンを 原町市立高平小学校 教諭 鈴木 供子…………… 25

◇ 平成15年度 福島県教育研究発表大会報告 …………… 28

◇ 授業に生きる資料

- ☆ 学ぶ意味を見出し、空間図形に関する豊かな感覚を養うための算数・数学教材の
製作とその活用の事例
教育センター教科教育チーム…………… 34

◇ 「お・し・ら・せ」

- ☆ 実践に役立つ教育資料 ～センター所蔵の研究紀要・資料から～ …………… 36
- ☆ 平成16年度講座の案内

「新しい学校づくり」をめざして ～開かれた学校、今、学校に求められているもの～



時代を捉え自らの錬磨を

社団法人 郡山法人会会長

門馬 眞澄

今、日本は大きな混乱の中にあります。こう申し上げても多少治安は悪くなったがまだまだ豊かだ、平和だというのが大方の認識でしょう。しかし、歴史という大きなスパンから見ると、革命や戦争こそ起こっていませんが、動乱の時代の中で、もがいているのが現在なのです。政治・経済・社会慣習などどれをとっても従来のものと異なった発想の転換を余儀なくされ、価値観もドラスティックに変貌しつつあります。その中で大切なものはなにある、やはり人であり、とりわけリーダーの資質がより強く問われてきます。リーダーとは一家にあっては父母であり、企業においてはCEO（経営最高責任者）、教職にある方々も当然リーダーです。しかし、どのリーダーにもその心髄たる責任感が欠落しているように思えてなりません。社会が爛熟してしまった後の放心状態がまだ続いているのでしょうか。

■イラクの戦後と日本

この夏以降、イラク陥落後のバグダッド

の市街地が毎日のようにテレビ放映されてきました。私はそれを見るたびに自分の青春時代、瓦礫の山と焼け野原の東京に立っていた己の姿をそこに重ね合わせてしまうのです。私をはじめ多くの日本人はボロ服をまとい、仕事を探し、その日その日の食料を求めて動き回りました。スリもかっぱらいも、強盗も横行していました。それでも人々は懸命に生きようとしていました。町には占領軍と言われたアメリカのG1たちがそこそこにおりました。彼等は痩せこけた我々と比べなんという違いでしたでしょう。体格も顔色もよく、背筋をしゃんと伸ばし、チューインガムを噛みながら、朗らかに闊歩していました。焼け残った施設のあちこちに、時には公共輸送機関の運転席ドアにまで「占領軍の命により許可なく立ち入るべからず」という表示が英語と日本語でいかめしく貼られ、いやでも我々は占領されているのだ、最高権力者はアメリカ軍なのだという事実を思い知らされていました。すらりと背が高く軍服を恰好よく着こなした彼等に、多くの日本人は羨望と憧れの眼差しを注いでいたと思います。そ

こには露骨な反米感情もなければ、卑屈な従属心もなかったのです。今まで耳にしてきたものとはあまりに異なる経済力とアメリカ文化の前に驚嘆していたのでしょう。GHQ（占領軍総司令部）という大きな権力が日本中で幅を利かせていたことも事実ですし、一部になりふり構わず利権をあさり火事場泥棒的な行為に走り、占領軍におもねる輩もいました。しかし、ほとんどの日本人は、必死に働くことでいつかアメリカ人のような豊かな生活ができるようになりたいと、努力していました。貧しさを恥じず、まっとうに生きる心の清々しさがそこにはありました。従順であっても気概と誇りを失わない気高さがありました。そのような日本国民の矜持は長い歴史的な変遷の中で、時代の精神的な鍛錬によって培われてきたものにほかなりません。それを倦まずたゆまず教え込んでくれた、有名無名の諸賢がいたことに感謝したいと思います。

儒教、封建主義思想、軍国主義、皇国史観のもたらしたことへの批判を耳にしますが、歴史の中では為政者の都合で学問も思想もときには歪曲されてしまいます。またその時代では快挙でも後世に暴挙といわれることはしばしばあります。歴史の事実と流れを冷静に受け止められる心が大切で、それを忘れると時代を見失うことになります。私は、現在の混乱も昭和20年代始めの混乱も同じ歴史の線上にあり、動乱と捉えています。ただ当時と異なるのは、今の動

乱期には物が溢れており、それだけに各人の方向性が定めにくいと言うことはありましよう。確固たる信念のリーダーが求められる所以です。

さて、動乱の今、リーダーとして教職にある方々はどのように児童生徒を指導していけばいいか、既製の枠から離れて考えられたことがありますか。風穴を開けようと挑戦されたことがありますか。10年先を見据えてご自分の教育理念を定めておられますか。与えられた形骸的な課題を外れ、いやむしろ拒否してもご自分を磨くことは腐心されていますか。今を動乱の時代と捉え教師としてのご自分をどのように位置づけるか、それにより次代を担う子供たちが大きな影響を受けることを感じとっておられますか。

ある新聞の世論調査に高校生の一番なりたい職業は1位が教師、次が公務員だったとききました。これを読んで「やはり、教師と言う職業はそれほど尊敬に値するものなのか」と満足なされたのなら、あまりにも世間知らずというものです。実は収入が安定しているからというのがナンバーワンに選ばれた理由でした。反対になりたくない職業のナンバーワンはサラリーマンでした。だれだって楽をして収入を得たいのは事実ですが、自分の生活の安定のみを優先させる生徒たちばかりが集まってしまったら、日本の教育は、将来はどうなるのだろうかと暗澹たる思いにかられました。

■精神的貴族者とは

私は社員教育や依頼された講演会でよくスペインの哲学者・経済学者であるオルテガ・イ・ガゼット（1883～1956）の言葉や思想を引用します。彼は20世紀初頭に「経済的發展によって人類は苦勞から解放される、しかしそこにユートピアはない」と見抜いていました。彼はまた人を「精神的な貴族者と精神的な労働者」に分けました。精神的な労働者とは権利のみを主張し義務を果たさない人たちのことです。戦後の誰かが貧しかった時代に労働運動が活発になり、その中で教師も含めた一部の労働者たちは権利のみを声高に主張してきました。つまり、精神的な労働者でもよろしいということにほかなりません。企業にとって精神的な労働者が跋扈することは存続をあやうくするものですが、賢明なる経営者は早期にそれらの跳梁を食い止めるべく手を打ちます。放っておけば企業の屋台骨を揺るがしかねません。旧国鉄、電電公社が民営化されてどれほど明るくすっきりした経営体質になったかは申しあげるまでもないでしょう。

閉鎖的、独善的な体質が払拭できなければ、企業なら当然倒産に追い込まれてしかるべきですが、教育と言ういわば租界特区ではそれありません。そして長い年代を経て積み上げ、培っていく教育の現場にも

その弊害の種は插かれ、それが今育っています。集団無責任体制という恐ろしい弊害です。その害毒に言された子供たちが育って社会や家庭の中核を占めています。真の指導者や企業経営者が必死でその毒を中和しようとしているのが今の状態です。

先生方が清貧に甘んじなくてはならないというわけではありませんが、教師という職業は利益利潤を追求する一般企業人と異なる所以はどこにあるのか、原点に帰っていただきたいものです。生徒たちが可視的な部分で判断し、安定性だけを求めて教師という職業を望んでいるとすれば、その非を正していただきたいものです。それには自らが精神的な貴族として誇りをもたれることです。

先生方の中にも誇りより尊大さのみ、謙虚さよりも権威に対する卑屈さのみが目につく方がいらっしゃることは大変残念なことに思われます。

■企業に学ぶこと

最近には各界のエキスパートを教育現場に招き、いろいろと話を聞こうという動きも出ているようです。また、学校の先生が企業の職場で研修されるという話も聞きました。どのような形で企業の中に参加されているのか私はよくわからないので、多くは申しません。ただ、顧客第一の姿勢や品質管理、合理化への取り組み、発想の具体化

などを短期間の滞在でどれだけ身に付けていけるのかは疑問に思っております。これらは受身の姿勢では習得できないことからです。冷たい言い方ですが、全然知らないよりは知っていただいたほうがいいのかくらいに私は思っております。

ただ、私ならば我が社にこられた先生に、中小企業の経営者がいかに人づくりに苦労しているかをお伝えするつもりです。学校のクラスに問題児がいるように、企業にも問題社員がおります。世を騒がせているリストラ対象に充分なり得る人物です。私はダメ社員を切り捨てず、彼等に敗者復活戦のチャンスを与えてきました。その結果、人が変わったように職場で活躍している社員も何人かおります。それは私にとって真剣勝負であり、賭けでもあります。中小企業の経営者は資金繰りだけでなくマニュアル以外のことで悪戦苦闘していることを知っていただきたいと思っています。人というもの、企業というものを幅広く捉えられることで先生の社会的な感覚が豊かさを増し、ひいては児童生徒や父母により柔軟な対応ができるのではないかと考えます。先生が

児童生徒に期待するように、企業経営者も先生に期待しているのです。

■もし、いま、イラクだったら

もし、今の日本がイラクのような状態におかれたら、皆さんはどうやって子供たちを教え導かれますか、どうやって民族の誇りを維持し、心の荒廃から彼等を守りますか。それができる立場にあるのが私は政治家よりも教育者だと思います。そして今、心の荒廃という意味に於いて日本もイラクと同じ戦乱の時代にあるのだという認識をもたれるようにお願いします。文部科学省、教育委員会の通達方針よりも児童生徒の顔に一喜一憂してください。安っぽい似非カルチャーにのみ走らず、ご自分の錬磨を追求してください。

教育の成果というものは決して一気呵成に現れるものでないことは、心有る人たちはよくわかっています。姑息な手段ではなく、広い視野と判断で児童生徒たちを導いていく教育者、目に見えないもの、大切な心を教える先生出でよ！

門馬眞澄氏のプロフィール

國學院大学卒（経済人会幹事）。現在、東北乳運株式会社代表取締役会長。株式会社トーシン取締役会長、郡山ホープ株式会社代表取締役会長も務める。

社団法人郡山法人会会長の他、郡山東ロータリークラブ会長、郡山商工会議所議員、郡山木鶏クラブ代表世話人を歴任。

学校評価研究チーム

学校評価システムの構築と学校改善

第139号(7月)において研究計画まで述べた。
本稿では、その後の経過について述べる。

I 学校評価システム

学校評価システムとは、各学校が、組織的に行う学校評価の枠組みである。そして、現在、各学校の実態に応じて、学校評価の目的、内容、方法、実施の時期及び関連組織等を具体化し、学校評価システムを構築することが求められている。

1 学校評価の目的とマネジメントサイクル

評価の結果に基づき、教育活動について改善を図り、教育の水準の向上を図るために学校評価を行う。したがって、学校評価自体が目的ではなく、あくまでも学校の教育目標の実現に向け、教育活動がどこまで有効に行われたかを見直し、教育の水準の向上を図るための手段である。

学校評価が学校経営に位置付けられ、実践を継続・累積することは、子どもの現状に変化をもたらすものであるとともに、教職員の意識の改革、資質の向上に資する等、教職員の現状にも変化をもたらすものである。

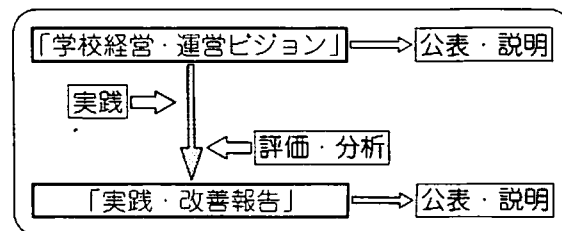
評価の前提となるものは計画・実践であり、評価のねらいは改善のためである。ここに、学校経営におけるマネジメントサイクルの必要性がある。

教育目標具現のために計画を立て(Plan)、実行し(Do)、その過程や結果を目標や計画に沿って評価し(Check)、さらにその結果をもとに改善する(Action)という一連のサイクル(マネジメントサイクル)の中で、教職員が主体となり、必要に応じて児童生徒や家庭と地域のみんなの目で学校評価を行う。

2 学校評価システムの中心

学校設置基準からも明確なように、各学校の教育目標具現のための教育活動、学校運営が学校評価の対象となる。しかしながら、各学校の教育目標は、組織体である学校の使命に関わる目標を公式に表明したものであり、抽象的・合法的で社会的承認を得やすいものの、単年度の活動の具体的な目標や評価の対象にはなりにくい場合が多い。このような状況の中、すべてにわたって網羅的に実践し評価・改善することには限界がある。したがって、各学校では、教育目標を受けて、重点的な目標と取り組み事項を明らかにする単年度の学校経営・運営計画(以下『学校経営・運営ビジョン』という。)を策定する必要がある。これによって、学校評価の内容や方針等その概要も見えてくる。

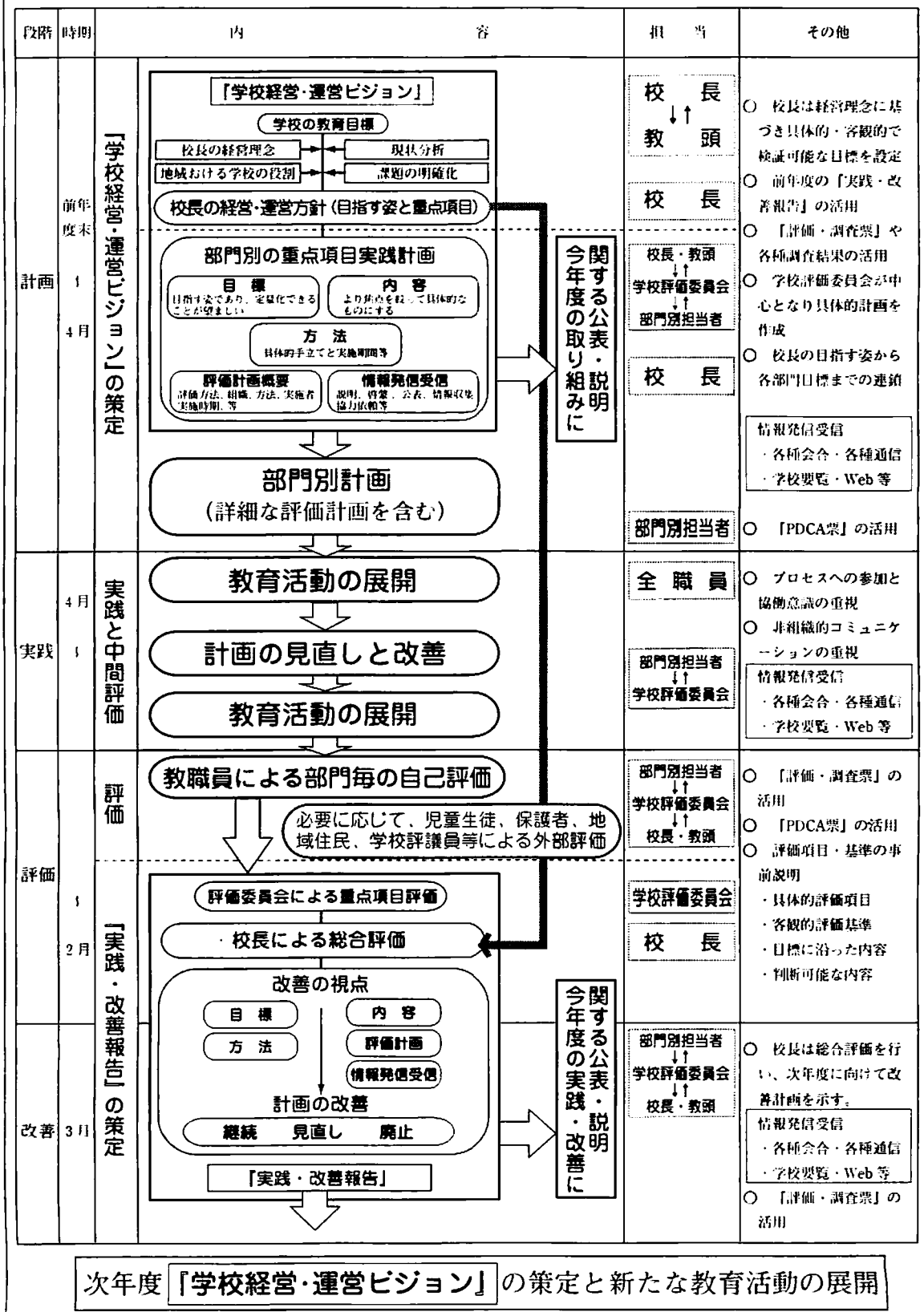
『学校経営・運営ビジョン』を立てた上で、実践及び評価・分析を行い、結果を実践の報告(以下『実践・改善報告』という。)にまとめるという一連の流れが学校評価の流れであり、『学校経営・運営ビジョン』と『実践・改善報告』が、学校評価システムの中心になる。



3 学校評価システムの概要

『学校経営・運営ビジョン』『実践・改善報告』を中心にその他の要件を加えると、学校評価システムの概要は次のようになる。

学校評価システム (このシステムそのものが「PDCA型」の趣旨を生かしたものです。)



次年度「学校経営・運営ビジョン」の策定と新たな教育活動の展開

4 学校評価に関わる組織

学校全体で学校評価に取り組むことが重要であり、校長が学校評価に関わる組織（以下「学校評価委員会」という。）を編成する。学校評価委員会編成にあたっては、計画・実践と評価・改善の一体化を図るために、学校規模、教職員の組織等の実態に応じて、各種校務分掌とリンクさせる必要がある。学校評価委員会は、各学校が、学校評価を進める上での牽引役であり調整役でもあり、各種委員会・各部・各学年・各教科が縦の組織であるならば、学校評価委員会は組織横断的となる。

このような観点に立ち、各学校の組織を複雑にしない方向を目指すならば、学校評価委員会は、これまでほとんどの学校に組織されている「校務運営委員会」や「企画委員会」等との一体化を図ることができる。

さらには、取り組む内容によっては、保護者、地域住民等からの意見聴取や委員会への参加も考えられる。

5 「学校経営・運営ビジョン」の作成

学校評価の2つの側面から、「学校経営・運営ビジョン」を次のように位置付ける。

○ 学校改善の営みの側面

「学校経営・運営ビジョン」は、年間教育計画の確認であり、統一的に教育実践をするための柱である。

○ 説明責任を果たすための資料としての側面

学校評価実践における情報公開の柱となる。

また、次のような活用法が考えられる。

- 前年度の総合的な評価結果と合わせて学校要覧への掲載や Web ページへの掲載を通して学校としての説明責任を果たす。
- 保護者、学校評議員、地域社会等への学校説

明資料として共通に使用する。

- 来訪者への学校説明資料とする。
- 学校内に常時掲示し、年間計画に基づく意図的・計画的活動であることを教職員が意識するとともに日々の教育活動の指針とする。

6 学校評価票

評価・調査票と PDCA 票を次のように位置付ける。

○ 評価・調査票（旧「学校評価票1」）

いわゆる質問形式によるチェックリストで、学校及び教職員が、子どもや家庭、地域の思いや願いを含めた自校の現状を正しく認識（事前）し、または、実践を振り返る（事中・事後）ための「評価」並びに「調査」に用いる。

○ PDCA 票（旧「学校評価票2」）

PDCA サイクルを意識した教育実践をするための枠組み（フレーム）である。

（なお、評価・調査票及び PDCA 票の詳細については紙面の都合上省略するが、「研究紀要 Vol. 32」または教育センター Web ページ「学校評価研究チームの研究のまとめ（平成14年度）」の「学校評価票1」「学校評価票2」を参照されたい。）

II 研究のまとめ（中間）

試行の結果、評価・調査票では、「自校の課題やよさが明確になる。」、PDCA 票では、「学校の教育目標からの一連の流れとして捉えることができ、教職員の納得を得やすいものである。」、学校評価システム全体と学校経営・運営ビジョンについては、「ともすれば評価されることに重点を置きがちであった学校評価がビジョンを前面に立て、学校としての説明責任と情報の積極的な開示を主眼としたことで、学校経営の在り方について一つの枠組みを提示することになる。」という意見が寄せられた。その他、詳細については、6月発行予定の「研究紀要 Vol. 33」で報告する。

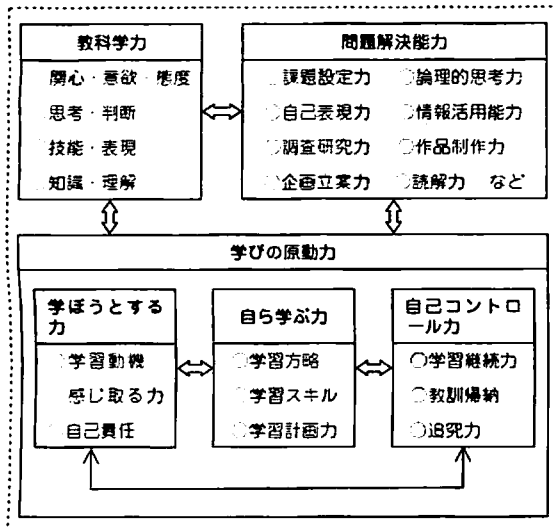
思考過程を重視したきめ細かな指導を充実させるための工夫

第139号（7月）において、研究の概要を述べた。本稿では、研究の実際について述べる。

I 研究の実際

1 研究仮説の設定

研究調査を行うに当たって、下の図に示した「問題解決能力」と「学びの原動力」、「教科学力」の構造図を作成し、この構造図に沿った研究仮説と調査項目を設定した。



図の「学びの原動力」は、子どもの学習意識や学習観、学習動機、学習スタイルや学習方略など見えない学力といった言葉で抱いていた認識を、「学びの原動力」として設定し、「学ぼうとする力」、「自ら学ぶ力」、「自己コントロール力」の3領域に整理したものである。これらの3つの力は相互に関連し合い、複合的に形成されていく「確かな学力」の基底にあると考えた。

そして、「学びの原動力」は、問題解決能力や教科学力に対して強い影響力を持つとともに、問題解決能力や教科学力の伸長・発達を、「学びの原動力」の質的变化・成長を促すという相互関連の構造モデルを示すものとして設定した。

問題解決能力は、様々な力が複雑に関係する力ではあるが、具体的な視点を設定することによって子どもの問題解決能力を把握するための項目として設定した。これらの項目は、教科において求められる学力に関係するものであり、問題解決能力の伸長・発達が、結果的に各教科の学力向上に寄与すると考えた。

2 研究調査の概要とプロセス

(1) 研究調査の概要

① 研究調査のねらい

生徒の「問題解決能力」、「学びの原動力」、「教科学力」の現状を調査し、3つの力の関係を分析・検証する。また、「確かな学力」向上に向けて、教科における具体的な学習指導に役立つ視点や手立てを提供する。

② 調査対象 中学校第3学年の生徒（429名）

③ 調査時期 平成15年7月～10月

④ 調査内容

○問題解決能力に関する調査

各教科を融合させた総合問題調査の実施を通して、問題解決能力の実態を調査した。

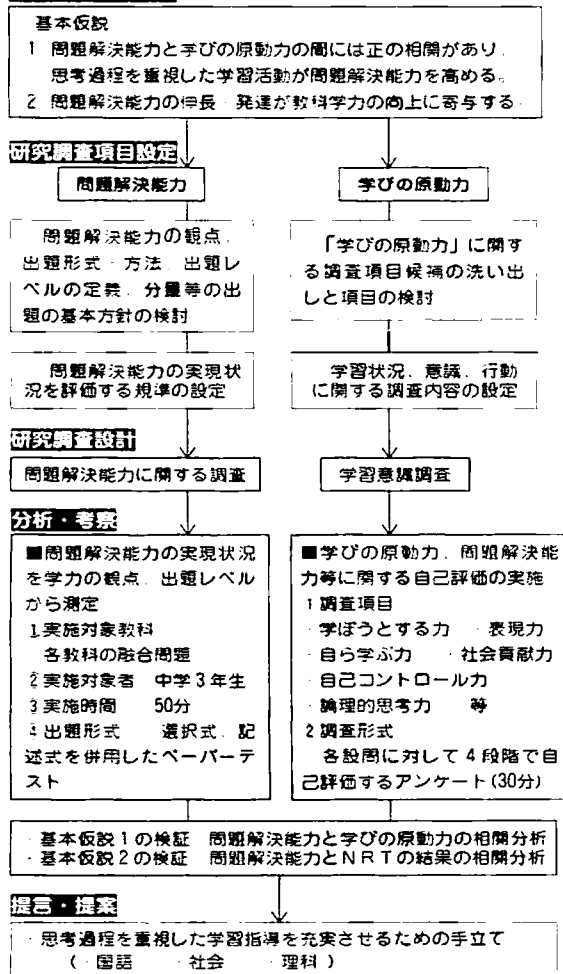
○学習意識に関する調査

学習観、学習動機、学習方略などの「学びの原動力」や「問題解決能力」、「社会的事象に関する関心度」の自己評価を、「とてもよくあてはまる」、「どちらかというにあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階に分けた選択肢の中から回答させた。

(2) 研究調査のプロセス

研究調査のプロセスは、次に示したように、研究調査フレーム、研究調査項目設定、研究調査設計、分析・考察、提言・提案に区分して行った。

研究調査フレーム



3 研究内容

(1) 総合問題調査による問題解決能力の実態調査

教科横断的な総合問題調査は、各生徒の問題解決能力の程度を把握するとともに、今後の生徒の学習や学校における学習指導の改善に資するための調査とした。また、問題解決能力について、ペーパーテストで実態調査することが適当なものを出題した。

総合問題調査は、特定の教科の内容を生徒がどの程度習熟しているかについて調べることを目的としていない。特定の知識は、その知識を応用できるかが重要であり、その習得のために、生徒がより広い概念理解や技能をどれだけ学習してきたかに依存している。

また、激しく変化する社会において個人が適応したり、課題に対処するために必要な問題解

決能力は、教科横断的に発達し、生涯にわたって知識や技能を習得するための基礎となる力である。

したがって、教科をまたぐ教科横断的な能力を測定することを主たる目的として調査分析した。

(2) 総合問題調査の結果分析

各生徒の総合スコアを偏差値換算し、上位からA層(7%)、B層(24%)、C層(38%)、D層(24%)、E層(7%)の割合に準ずる形で、段階の問題解決能力レベルを設定し、総合問題調査の結果を学力層ごとに分析した。

全体として、素材(文章、グラフ、図、表など)を読み取り、与えられた情報の単純な操作によって導き出す力はほとんどの生徒が身に付いている。

しかし、情報を正確に読みこなし、情報を具体的な事例と関連させたり、理解したことを的確に判断し、自己表現する力が不十分であることが分かった。

生徒が各教科において新しい情報を理解する場合には、注意深く、合理的に(あるいは正確に)思考して、事実を把握し、解釈する学習活動を行っていく必要がある。このことは、生徒の学習過程において、問題解決の結果よりもプロセス(思考過程)を重視することを意味する。そして、知識や理解状態をモニターするために、情報のもつ意味内容を自己説明させたり、失敗に対する柔軟な態度を育成したりする思考過程を重視する学習指導が大切である。このことが、ひいては、生徒の自己表現力の育成につながるものと考えられる。

(3) 学習意識調査の概要

生徒たちが、全体としてどのような学習を行っているかを調査するためには、より広範な調査研究が必要である。

まず、「学習観や学習動機は、学習方法を直接的に規定し、ひいては問題解決能力や教科学

力に大きな影響を与えている」という研究仮説を設定した。そして、「学びの原動力」となる、学習方法（学習方略、学習スキル）とその背後にある学習観、学習動機、目的観などを検討し、それらの「学びの原動力」と問題解決能力や教科学力との関連を調査分析した。

① 学習意識調査項目の設定

「学びの原動力」として設定した「学ぼうとする力」、「自ら学ぶ力」、「自己コントロール力」のⅠ～Ⅴの下位項目調査や「問題解決能力の自己評価」、「社会的事象に関する関心度」の実態を客観的に把握するため、次の7領域の質問項目を設定した。

- 「学びの原動力」に関する調査
 - Ⅰ 学習動機に関する調査
 - Ⅱ 学習スキルに関する調査
 - Ⅲ 学習方略に関する調査
 - Ⅳ 思考過程に関する調査
 - Ⅴ 自己コントロール力に関する調査
- 「社会的事象の関心度」の調査
- 「問題解決能力の自己評価」の調査

② 学習意識調査の結果分析

学習意識調査結果を総合問題調査結果でカテゴリー化したA層～E層ごとに分析したところ、次に示す項目について学力層間で大きな差異が見られた。

- ・「学ぶ楽しさや学習の充実感」（学習動機）
- ・「学び方の工夫」（学習スキル）
- ・「体制化・精緻化方略」（学習方略）
- ・「暗記重視型・反復方略」（学習方略）
- ・「追究する力」（思考過程）
- ・「課題追究力」（自己コントロール力）
- ・「時事的内容に関するコミュニケーション」（社会的事象に関する関心度）
- ・「論理的思考力」、「表現力」、「情報活用能力」等（問題解決能力の自己評価）

このように、「学びの原動力」として設定した3領域・下位項目や「社会的事象に関する関心度」が、「問題解決能力」に及ぼす影響について調査分析したが、問題解決能力と「学びの原動力」の間には正の相関があり、思考過程を重視した学習が問題解決能力を高める」という基本仮説1が検証された。

「問題解決能力の自己評価」の調査において、「論理的思考力」、「情報活用能力」、「自己表現力」、「課題設定力」は、生徒自身も課題意識を持っており、問題解決能力の育成は、今後一層必要であることが明白になった。また、教科学力（NRT 調査）においても、問題解決能力と同様に、「学びの原動力」との相関が強いことが分かった。

これらの結果は、「学びの原動力」が問題解決能力や教科学力に対して強い影響を及ぼしているとともに、問題解決能力や教科学力の伸長・発達を、「学びの原動力」の成長を促すという相乗効果を持って機能していることを示している。学びの意義や目的観、学習方略を充実させるとともに、思考過程を重視した学習指導の充実が問題解決能力の育成や教科学力の向上につながると思う。

(4) 思考過程を重視した学習指導の手立て

総合問題調査や学習意識調査の分析結果を受けて、本研究では、国語、社会、理科の3教科について、思考過程を重視した学習指導を行うに当たっての具体的な手立てを研究した。（具体的手立ての詳細は、来年度初めに刊行する研究紀要や県教育センター Web ページに掲載予定の研究報告書を参照。）

II 今後の課題

今後は、調査研究の成果をより具体化するための実践研究を行うとともに、問題解決能力を測るための作問事例を充実させる必要がある。

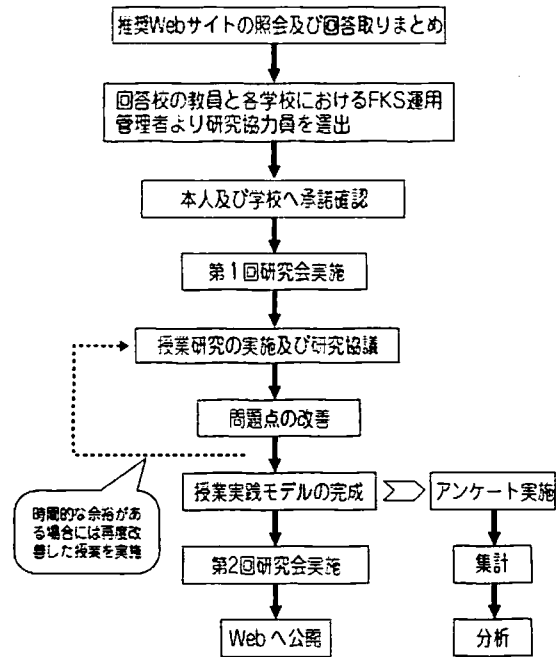
『教育用コンテンツを活用した授業実践モデルの開発と研究』

I 研究の実際

1 授業実践モデルの開発

全校種・教科における IT を活用した授業実践モデルの開発を行った。

(1) 開発手順



① 研究協力員の選出方法

年度初めに授業で活用できる Web サイトの集約*1を行った。この回答者及びFKS運用主任の中から、校種・教科のバランスがとれるように35名の研究協力員を選び出し研究を依頼した。

ア 選出理由

推奨 Web サイトの回答者やFKS運用主任であれば、日ごろよりITを活用した授業を実施している可能性が高く、参考となる授業実践モデルを開発できると考えた。

イ 研究協力員内訳

校種内訳	小学校	13名
	中学校	12名
	高等学校	6名
	盲・聾・養護学校	4名

教科内訳	国語	3名	美術	1名
	社会・地歴公民	6名	農業	1名
	算数・数学	5名	工業	1名
	理科	5名	商業	1名
	保健体育	2名	養護	3名
	英語	3名	全教科	1名
	技術・家庭	3名		

② 研究の実際

第1回研究会において、ITを活用したモデル開発までの概要と手順及び授業研究実施までの手順について説明を行った。

ア モデル案の提示、検討

○ 単元、テーマ、IT活用方法については、各研究協力員が提案し、モデル案は事前にメールで情報活用研究チームに送付することにした。

○ 送付されたモデル案のIT活用と指導内容については、情報活用チームで事前に検討を行った。

イ 授業研究の実施

○ 平成16年2月末までに、最低1回の授業研究を実施してもらうことにした。

○ 授業研究日に、センター指導主事が訪問し、授業参観とビデオの撮影*2を行った。

○ 生徒及び研究協力員に対して、アンケートを実施し、集計、分析を行った。

○ 授業研究後、研究協力員とセンター指導主事との間でIT活用に関する協議を行っ

*1 Webサイトの集約 詳細については後述。

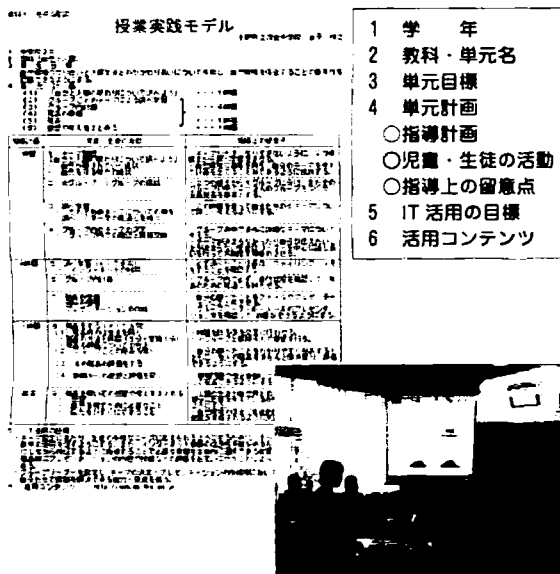
*2 ビデオ撮影 後述参照。

た。また、研究協力員に時間的な余裕がある場合には、改善案で再度授業研究を実施してもらおうことにした。

ウ 授業実践モデル形式

昨年度は「教材レシピ」の形式を考え、開発を行ったが、今年度については、単元全体の計画を示し、どの単元のどの場面において、どんな方法でITを活用したのかが把握できるようにと考え、昨年度の教材レシピの改善を図った。

○ 形式



○ クリップビデオの貼り付け

ITを活用して、どのように授業展開されたのかがわかるように、授業風景を撮影したビデオを、90秒以内のMPEG1*1に変換し、クリップビデオとしてモデル案に貼り付けた。

エ モデルの改善

授業実践モデルに関しては、センター指導主事等と研究協力員が協議を重ねた上で、改善案を作成することとした。

③ 公開までの過程

完成した授業実践モデルについては、校種

や教科で検索できるように分類し、著作権の確認をした上で、センターのWebページで公開をする予定である。

(2) 授業実践から見えたこと（中間報告）

① 算数・数学の空間図形等の学習において、シミュレーション活用は児童生徒の理解を深めるのに有効であることがわかった。また、有効なWebサイトを利用すると、ソフト購入費がかからないだけでなく、時間的コストも低くおさえられることもわかった。

② 各教科での調べ学習においては、IT活用が大変多かった。しかしながら留意しなければならないことも少なくない。以下、留意点を記す。

- ・複数のサイトから情報を収集することで、情報の信憑性について突きあわせをしたり、図書文献等と照らしあわせたりするような指導が必要である。
- ・検索エンジン*2を利用する場合、効率の点からキーワードを示しておくことよい。
- ・検索時間短縮のため、お気に入りへの登録をしておくことも必要である。
- ・調べた後の考察やまとめる時間は十分に取る必要がある。
- ・発表をする場合、出典先を明示するなど、著作権について配慮するように指導することが大切である。
- ・調べたことを記入するワークシートなどを準備しておくことは、とても有意義である。

③ TV会議システムなどを活用した交流学習は、養護学校における自立活動を支援するのに有効であった。

④ 作業が伴う授業で、その工程を動画やシミュレーションで示すことで、個々の生徒の作業速度に対応できると考えられた。

*1 MPEG1 MPEGはデジタル動画を圧縮する技術。MPEG1は再生品質がVTR再生並みだといわれている。

*2 検索エンジン インターネット上で、目的とするサイトを探すためにデータベース的な役割を果たすサイト。

2 教育用コンテンツの整備

IT をより効果的に活用してもらうために、教育用コンテンツの分類、整備を行った。

(1) 推奨 Web サイトの集約、公開

教科の学習に活用できる Web サイトを集約し、一定の基準で検証し、校種・教科・学年(領域)ごとの分類を行い Web 公開した。

① 収集方法

FKS 参加校359校より、利用率の高い243校を抽出し、照会をかけた。

② 検証基準

宗教的、政治的、商用的な色彩の濃いもの及び生徒に害を与えると考えられるものは除いた。

③ 公開

約800件の Web サイトを公開できた。

<http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/web/index.html>

推奨Webサイト

校種	教科	学年	サイト名	URL
小学校	国語	1年	国語の楽しさを伝えるサイト	http://www.fks.ed.jp/05ken3/web/01010101.html
小学校	算数	2年	算数の基礎を学ぶサイト	http://www.fks.ed.jp/05ken3/web/01010202.html
中学校	英語	1年	英語の基礎を学ぶサイト	http://www.fks.ed.jp/05ken3/web/02010101.html
高等学校	物理	1年	物理の基礎を学ぶサイト	http://www.fks.ed.jp/05ken3/web/03010101.html

(2) 地域コンテンツの教材化

データ平準化のため、県内90市町村ごとの提供画像数が最低100枚程度になることを目指し、14年度において資料提供の少ない市町村

に対し、資料提供を再依頼した(FKS 担当と連携)。この際、教科書、小学校社会科副読本等から必要な項目(カテゴリー)を洗い出し、カテゴリーごとの写真提供を依頼した。

また、14年度までに収集した資料(印刷物13,000頁、画像35,000点、映像4,900分)については、Web サイトで公開*1されているが、資料点数が多いため、授業で活用するときには検索がしやすいような分類を行うことにした。

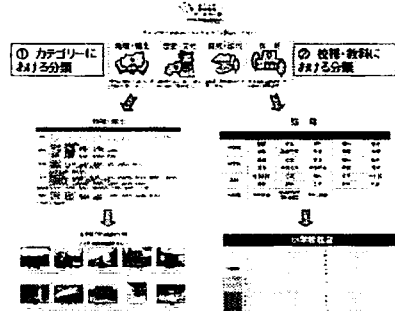
① カテゴリーごとの分類

市町村画像を7つのカテゴリーで分類した。
【7つのカテゴリー】

「施設」、「自然・風景」、「産業」、「歴史」、「民俗・文化」、「災害」、「その他」

② 校種・教科ごとの分類

県に登録されている教育ボランティア*2の中から教員免許を有している人(的)を絞って依頼し、分類を行ってもらった。



II まとめ

授業実践モデルについては、まだ研究途中であるが、年度末には、35の授業実践モデルを公開できる予定である。

なお、詳細については、平成16年6月に発行の「研究紀要 VOL33」で報告する。

*1 公開 <http://www.db.fks.ed.jp/>

*2 教育ボランティア 県内の地域センター(教育事務所)のコーディネーター(指導主事等)が中心となって、人材募集、発掘、登録されたボランティア。

教育調査の実施状況

教育センターでは、県内各市町村教育委員会、市町村立小中学校、県立学校等の協力を得て、各種教育調査事業を実施している。

1. 学校評議員制度設置に関する調査

本県の学校評議員制度に関する取り組みの状況を把握するために、本年度6月から7月にかけて現状調査を実施した。

(1) 本県の現状

① 設置の状況 <設置> <未設置> (%)

本県	46.7	53.3
全国	51.7	48.3

県内の教育委員会で全部又は一部で学校評議員制度を導入していると回答したのは、42市町村教育委員会である。全国平均と比べると県全体で5ポイント下回っている。

② 学校評議員の男女比 <男> <女>

本県	小学校1,996名	76.2	23.8
	中学校 911名	77.8	22.2
	県立学校 425名	78.4	21.6
全国		71.1	28.9

男女共同参画社会の構築が叫ばれる中、本県の場合醸成の学校評議員の割合が全国平均を下回っている。

③ 学校評議員の任期

本県	<1年>	76.2	<1年を超える>	23.8
	全国	95.7		4.3

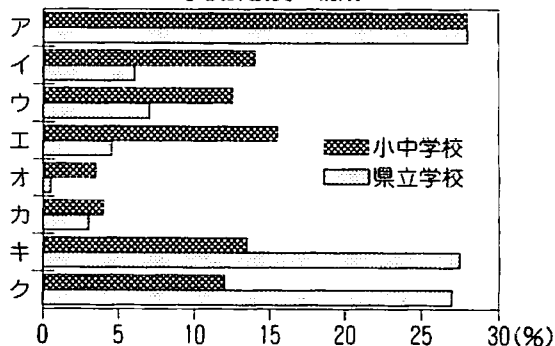
(%)

学校評議員の委嘱期間又は任期については全国的には、ほとんどが1年である。本県では1年を超える委嘱の場合、期間は「2年」が最長である。

④ 学校評議員の構成

- ア. 保護者
- イ. 通学区自治会代表
- ウ. 福祉関係者
- エ. 青少年育成団体代表
- オ. 交通安全関係者
- カ. 学校医等児童生徒の健康に関わる者
- キ. 学識経験者
- ク. その他

学校評議員の構成



各校種とも多岐にわたる構成となっており、県立学校では、学識経験者の割合が多い。「その他」では、同窓会代表、企業経営者など多く見られる。

⑤ 意見の聞き取り

校長は、「家庭や地域の連携に関する情報や教育活動に対する意見」(小中)や「特色ある学校づくりに関する意見や職員の意識の啓発に効果的な情報や意見」(県立)を必要としている。

学校評議員は、「学校行事や教育活動等の運営方法や評価」や「地域との連携のあり方、児童生徒の学校内外での生活」などについて、校長から意見を求められていると回答している。

学校評議員の意見で対応に苦慮することが予測されるものとして、校長は「児童生徒等のプライバシーの侵害、教師の職能等への批判」をあげている。

校長は、「全員を招集し、一括して意見を聞き取っている」と同時に「個別に意見を聞き取っている」としている。

年間回数に分けての意見の聞き取りをしており、平均回数は小中学校で「2.19回」、県立学校で「3.09回」である。運営は、ほとんどの市町村教育委員会が学校の裁量に任せている。

学校評議員の意見をどう反映しているかという質問では、校長は、「教育課程の点検と改善」（小中）や「情報を共有して生徒指導に生かす、分掌事務内容等の改善を図る」（県立）という項目に回答している。学校評議員は、「運営改善のための観点に沿って意見を述べている」また「今後述べていく」としている。

学校評議員の意見を学校運営に反映していくためには、意見を反映していくプロセスの明確化、学校評議員の研修、運営改善のための観点作りへの参画などをあげている。

⑥ 教育活動の説明や報告等

校長は、「教育活動の概要を年度当初に説明し、その成果について報告している」と全体の7割程度が回答している。「報告をしていない」の項目の該当はなく、各学校で工夫しながら教育活動の説明や報告を実施している。

また、学校評議員の記録については、小中学校で8割、県立学校で9割の学校が「学校独自の記録に止めている」状況である。

(2) 学校評議員制度充実のために

① 予算措置

半数以上の校長は、「現在の配当予算で十分」としている。半面、「ボランティア保険費用など、学校評議員本人の不利益を回避するための予算措置」の必要性にも3割前後の校長が回答している。市町村教育委員会の中には、特別職に準じた措置を講じているところもあるが、まだ少数である。校長の回答の中には、学校評議員の

年齢構成などから、不測の事態を想定した予算措置の必要性についても指摘しているものも見られた。

② 適性を重視した人選

学校評議員の構成は、多岐にわたっている。学校評議員個々の意識も、学校運営改善に対して建設的なものが多く見られた。今後、学校評議員の人選に当たっては、校長が意見を聞き取る領域によって、その適性をより重視して推薦をしていくことが大切であり、領域の適性を重視した人選をすることにより制度の充実がさらに期待できるものと思われる。

③ 意識の啓発

学校評議員制度設置に関する趣旨を十分に理解して、この制度の目的をお互いに共有しながら、地域に開かれた特色ある学校づくりのために制度を機能させていくことが大切である。学校評議員の中には、学校評議員としての研修機会の確保を望む意見も見られることから、学校評議員に対して委嘱するだけでなく、学校、保護者、地域社会、学校評議員それぞれが、この制度の趣旨や目的をよく理解する機会をさらに拡充していくことが大切である。

2. 「ふくしまの学習意識」に関する調査

本県の児童生徒の生活状況、学習に対する意識等について現状を把握し、教育行政へ生かす資料を得ることを目的として本年度より実施。前述の調査と合わせて調査結果を教育センターホームページに掲載するので、詳しくはホームページをご覧ください。

(<http://www.center.fks.ed.jp>)

【問い合わせ等】

企画・研究グループ教育調査チーム
(内線14番)

ライフ・ステージの課題に沿った研修をめざして

平成15年度基本研修から

経験者研修Ⅱがわかりました

経験者研修Ⅱは、在職期間が10年に達した教諭等に対して、個々の能力、適性等に応じた研修を実施することにより、教科指導、生徒指導等に関する指導力の向上を図ろうとするものです。

〈研修の概要〉

得意分野を伸ばし、不得意分野を克服するための 評価と研修計画

対象教員が自ら主体的に取り組む研修

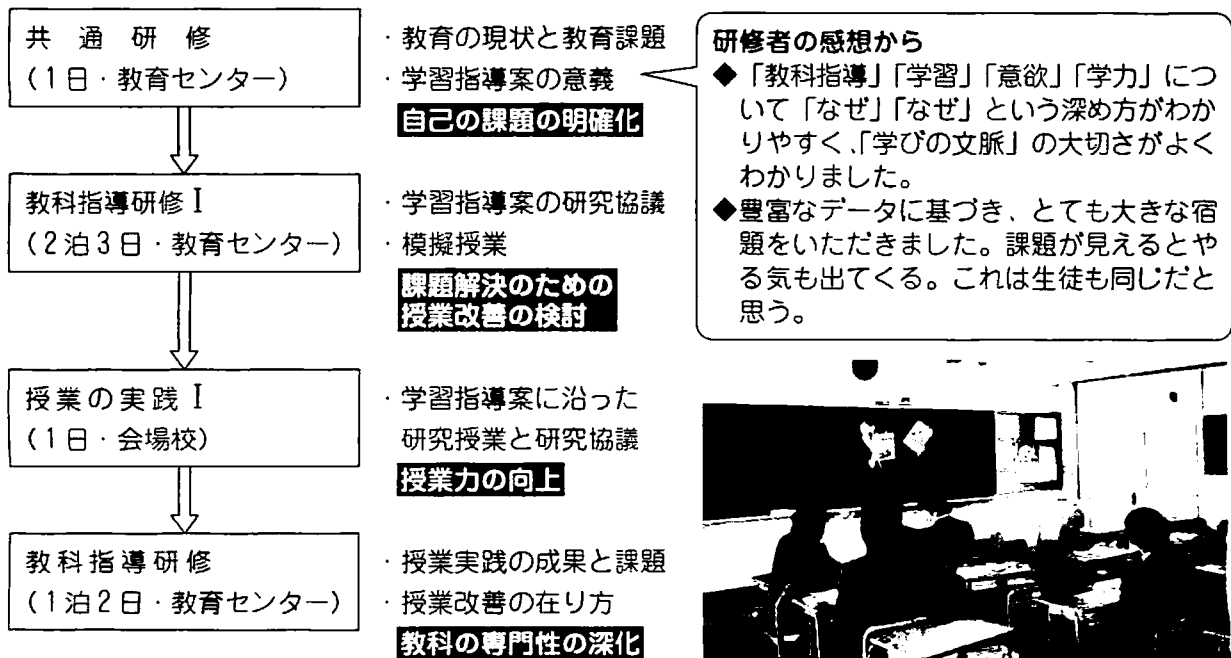
校外で(休業期間中等)

- 共通研修(1日)
- 教科指導研修(7日程度)
- 生徒指導等研修(3日程度)
- 選択研修(4日程度)

校内で(授業期間中)

- 授業力の向上に関すること(7日以上)
- 教育課題の解決に向けた実践に関すること(4日以上)
- 特定課題研修(4日以上)

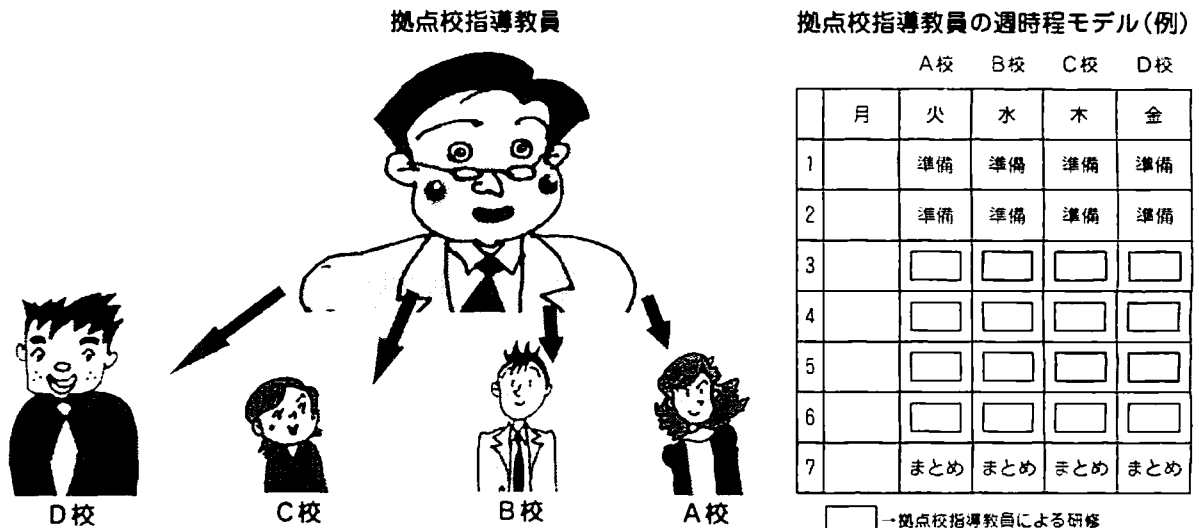
〈研修の実際〉平成15年度経験者研修Ⅱの中から、高等学校の教科指導研修の内容を紹介します。



小・中学校の初任者研修がかわります

平成15年度から3カ年計画で、小・中学校の初任者研修が新方式に移行します。今年度は、対象教員の3分の1にあたる、小学校26校、中学校25校で新方式による初任者研修が行われました。

新方式（拠点校方式）とは、初任者4人に1人の割合で指導に従事する「拠点校指導教員」を配置し、「校内指導教員」等と連携しながら初任者指導に当たる方式です。



○「拠点校指導教員」は、複数の学校の初任者を指導します

⇒ 1人の「拠点校指導教員」が4人の初任者を指導するため、勤務校以外に複数の学校に出向き、指導を行います。

○「拠点校指導教員」は、1日7時間同一校に勤務します

⇒ 「拠点校指導教員」による初任者への指導は4時間とし、週時程の中に位置づけて固定します。あとの3時間は準備・まとめの時間です。

○「校内指導教員」は、校内の先生方と連携を図り、初任者指導を行います

⇒ 「校内指導教員」は、他の教員と連携して校内における研修を進める、コーディネーターの役割を果たします。

〈新方式による初任者研修を実施した学校から〉

・ 拠点校指導教員は豊かな経験と、学級経営や生徒指導の力量に優れており、研修の内容が充実している。また、決められた研修内容以外に初任者の悩みの相談にもものっている。

・ 拠点校指導教員が、4人の初任者に共通した姿勢で専門的に関わることで、初任者の現状にあった、しかも質の高い研修を可能にできた。

初任者研修の指導は、拠点校指導教員だけに任されるものではありません。校長、教頭の指導のもと、「校内指導教員」がコーディネーター役となって、「拠点校指導教員」の職務を補充しながら全教職員で指導にあたるのが大切です。

性に関する指導は十分ですか？

～在り方生き方を育む性に関する指導～

青少年の性意識の変化、性モラルの低下といった言葉がメディアを賑わしています。今回は、大きな社会問題の一つとなっている性の問題に焦点を当て、人間としての在り方生き方にかかわる性に関する指導について、各学校における取り組みを考えてみましょう。

〈事例〉性の問題に考え込む山本先生

「ちょっと、お話を聞いていただけますか」
2学期半ばのある日、山本先生（40代前半男性、高校2年生担任）は、保健室の川島先生（50代前半女性、養護教諭）を訪ねました。

「この間先生に勧められて参加した健康教育研修会で10代の人工妊娠中絶件数が1,200件を超え、本県は全国ワースト5位だと聞いて驚きました。単純に県内に100の高校があるとして、1校あたり10人以上該当する生徒がいる計算になりますよね。私は思わずクラスの生徒たちの顔を思い浮かべてしまいました。それから、講師は親や教師は生徒たちの実態を知らなさすぎだとも言っていました」

「そうでしたか」と川島先生は応えました。そして、「実は…」と養護教諭の立場からの話をしてくれました。

「親や一般の教師は知らないのかもしれませんが、保健室で生徒たちの話に耳を傾けていると、本当に驚いたり、胸を痛めたりすることが少なくないですよ」

山本先生は研修会からもたげている漠然とした不安を胸にしながら、川島先生の話に聞き入りました。

「生徒たちは性に関してあまりに無知だし、メディアからの情報を鵜呑みにして簡単に考えて

いるのですね。小・中学校から発達段階にあわせて、性に関する指導を積み上げてきているはずなのに」と、前任校での苦い経験や生徒たちとの会話の一部を話してくれました。



山本先生は川島先生の話聞きながら、研修会からもたげている不安が現実のものであることを実感しました。そして、改めて性に関する指導について取り上げてみなければと考えました。しかし、具体的には何をどう指導したらよいものやら…。

山本先生は川島先生のアドバイスを心得、性に関するロングホームルームの指導の展開について考えてみることにしました。

【在り方生き方を育む性に関する指導】

学校における性に関する指導は、男女の体の

しくみの違い、生殖にかかわる機能の成熟、避妊、性感染症等の単なる科学的知識を与えるだけではなく、生命尊重、人間尊重、男女平等等の精神に基づいて児童生徒が健全な異性観を持ち、望ましい意志決定や行動選択が出来るようにすることをねらいとして、人間としての在り方生き方に深く関わって行われるものです。

10代の性交経験率の上昇や無防備な性交の増加を背景に、10代の人工妊娠中絶率の上昇、性感染症の増加等が現実の差し迫った問題となっています。新しい学習指導要領では、中学3年でエイズと性感染症について、高等学校においては避妊、異性を尊重する態度や性に関する情報等への対処、適切な意志決定や行動選択の必要性についても扱うことになっています。

1 意識や行動のギャップへの気づきを

児童生徒の身体は性的早熟化が進み、その一方で性に関する情報があふれ、性的な刺激にさらされています。このような現実を踏まえ、児童生徒の意識や行動と、親や教師の認識との間には大きなギャップがあることを理解した上で指導していく必要があります。

2 メディアリテラシー教育の視点を

児童生徒の性に関する知識や価値観は、テレビ、雑誌、インターネット等のメディアに大きく影響されています。その特性を十分理解しなければ、誤った知識や価値観を持つことになり、不利益や大きなダメージを被る危険性があることを教えていく必要があります。

3 健全な発達の要求としての視点を

今、親や教師は児童生徒が身体や性について持つ疑問や関心、それを確かめようとする行動を健全な発達の要求として正面から見つめ直し応えてやる努力が求められているともいえます。

す。ふたをして秘密めいたものにしておく対応は、メディアからの悪影響を拡大こそすれ、性に関する正しい知識や価値観を持たせることには必ずしもつながりません。

4 心の健康問題の視点を

心理的・環境的要因が心の健康問題に影響を与え、自尊感情（セルフエスティーム）の育成を妨げ、自分はもちろん他人を大切にすることが出来ずに、児童生徒を性行動に走らせていることも考えなくてははいけない視点です。

5 在り方生き方にかかわる視点を

自分に自信が持て、毎日が充実し将来に希望を持てる学校や家庭の生活を基盤に、親や教師は児童生徒に対して、性に関する問題は生や命にかかわる大切なものであり、人間としての在り方生き方に深くかかわるものであることをはっきりと示してやることが求められています。

性に関する指導は、性に関する考え方の進展や性科学の発達を踏まえ、①教育的に価値ある内容 ②親や教師等の同意の得られる内容 ③児童生徒の発達段階と個人差に配慮した内容等を基本に据えて、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等の教育課程上に位置付け、計画的、組織的に進めることが必要です。

その際、学校内はもちろん、小・中・高等学校間の指導の関連、家庭や地域の保健担当者との連携等を見据えた指導が大切です。また、これまでの講義中心の授業に加え、課題解決・調べ学習、ロールプレイング、ケーススタディ、ディベート、ブレインストーミング等の実践的で参加体験型の学習方法を取り入れることが児童生徒の心に響く指導をする上で効果的です。

【山本先生の取り組み】

山本先生は、①生徒の実態把握のために予めアンケート調査を行う ②授業の展開としてディベートを取り入れる ③ティーム・ティーチングの授業として、川島先生に養護教諭の立場から、望まない妊娠をした生徒のその後や日々目している性情報には誤ったものが多数含まれていることを話してもらうことにしました。

また、この問題意識と取り組みをクラスの保健体育担当である保健主事の加藤先生にも相談しました。加藤先生も同じ心配をされており、性に関する講話を保健福祉事務所に依頼することを校長・教頭と相談中であるので、学校全体での取り組みの糸口として是非やってみてくださいと支持してくれました。

山本先生は、クラスの生徒に性に関するロングホームルームを実施することを予告し、ねらいを話した上で事前のアンケートを行いました。ホームルーム運営委員にはアンケート結果を基にして、ディベートの発表者各6名の選定を依頼するとともに、予め当日の展開について話し合いを持ちました。

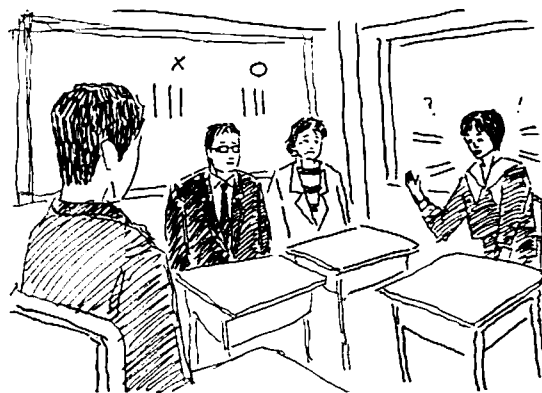
クラスの生徒に実施したアンケート結果は、「お互いが好きなら性行為をしてもいいか」の質問に対する賛成の割合の高さ、中学校までの性に関する授業実践のばらつき、性に関する興味関心の強さ等、いずれも山本先生の予想を上回りました。また、ホームルーム運営委員との話し合いは、誤った性に関する知識や価値観が生徒たちに信じられていることを推測するのに十分であり、性に関するロングホームルーム実施の切実さを裏付けるものでした。

【性に関するロングホームルーム】

山本 今日、「興味本位の『性』からかけがえない『性』へ」とのテーマで、養護教諭の川島先生にも参加してもらいます。進め方はディベートと言って……

司会 はじめに、「お互いが好きなら性行為をしてもいいか」に賛成である齋藤君から、その理由について話してください。

齋藤 僕はお互いが好きならそれが自然なのではないかと思うんです。アンケート結果も賛成の人数のほうが多く、それを裏付けています。それにもう高校生ですし、自分のすることに十分責任をとれる年齢になっていると思うんです。(肯定側立論)



中野 賛成側に質問します。高校生なのだから十分責任をとることが可能な年齢だとの根拠はなんですか。(否定側からの反対尋問)

齋藤 考え方はもう大人と同じだし、いまさら、言うまでもないことだと思います。

(中 略)

中野 アンケートの結果は性に関する知識や異性の気持ちに対する理解不足を裏付けていると思います。クラスの何人の男子が正確に妊娠や避妊の知識を持っているのでしょうか。それに、そうしようと言われたら、

自分の気持ちにかかわらず応ずるべきだと
の女子の考えも疑問です。(否定側立論)

今村 反対側に質問します。大人の考えは古い
のではないのでしょうか。性に関してもっと
自由でいいのではないですか。こんなに性
の情報が多くなっているのに、何か悪いこ
とであるかのような考えはおかしいと思
います。(肯定側からの反対尋問)

(中 略)

司会 では、川島先生からの話をお願いします。

川島 はい、今日はみなさんの考えを聞かせて
いただいて、私も大変勉強になりました。
私からは二つ話をします。

一つは、ある高校の私と同じ養護教諭の
先生からお聞きした話です。好きだったら
性行為をするのが自然だと彼に言われ、望
まない妊娠をしてしまった女子生徒の話で
す。彼女は本当は嫌だったのだけれど、嫌
われてはと応じたそうです。彼は妊娠なん
て簡単にするはずないと…

もう一つは、メディアを通じてみなさん
が接している性に関する情報や価値観をそ
のまま信じていいのかということです。こ
こにある調査結果があります。性に関する
メディアに接している人は、そうでない人
より性に関して許容的になり、露骨に歪め
られ強調された情報を一般的なものとして
受け入れてしまう…

生徒の性に関するロングホームルームの感想
には次のようなことが書かれていました。

性に関することは分かったつもりでその
人次第だと考えていたけど、軽々しく考え
てはいけないんだと思い知らされました。

本当は分かっていないことに気付かされま
した。(男子)

本当に好きだと言うことは、簡単にイエ
スと言うことではないと考えさせられまし
た。リスクの大きさを考えて、自分を大切
にしたいと思います。(女子)

メディアの情報を疑いもせずに、そのま
ま信じていた自分の認識不足もあります
が、大人がきちんと教えてくれないことも
問題だと思います。(男子)

山本先生はクラスのアナケート結果と今回の
感想を資料として、学期末の保護者会に紹介し
て考えてもらうことにしました。川島先生は性
に関する問題を保健室の中だけでとらえてきた
ことを反省させられ、今回実施して本当によか
ったと思いました。

生徒の感想は保健主事の加藤先生にも目を通
してもらいました。今回の授業が学校全体での
性の問題に対する取り組みのきっかけになれば
との気持ちは、3人に共通する思いでした。

【おわりに】

性に関しては、児童生徒の意識や行動と親や
教師の認識との間に大きなギャップがありま
す。性の問題を心の健康問題や児童生徒の健全
な発達の要求として捉え直し、性に関する考え
方の進展や性科学・メディアの発達を踏まえ、
人間としての在り方生き方に深くかかわった指
導を行うことが、今まさに求められています。

◇引用・参考文献

学校における性教育の考え方、進め方 文部省 ぎょうせい
意志決定・行動選択の力を育てる高等学校保健学習のプラン
日本学校保健会
いま求められる性教育 月刊生徒指導2003年12月号 学事出版
性教育はこれでよいが 教育と医学2003年8月号
慶應義塾大学出版会
青少年の性 青少年問題2003年3月号 青少年問題研究会

授業にコンピュータを活用してみませんか

1 コンピュータを使った教材作成講座の紹介

本年度情報教育チームでは、下記の専門研修講座を開講しました。

アプリケーション活用
マルチメディア活用
表計算・データベース
Web ページデザイン
プログラミング言語
インターネット技術
校内 LAN 構築
教科「情報」
情報教育研修

講座要項やテキストは、教育センター Web ページ <http://www.center.fks.ed.jp/> をご覧ください。

今回は、6 月から前期・中期・後期の 3 回にわたって実施された「コンピュータを使った教材作成講座」(情報教育研修) について紹介します。

(1) 講座の内容

この講座は、「コンピュータ操作・技術が中級以上の教員を対象とし、各教科・科目の中で活用できるソフトウェア等の開発を通して、その見識と指導力を高める。」という目的で開設されています。

具体的には普段の授業や校務の中で、コンピュータを生かした教材や校務処理システムなどの開発をしたいと考えている先生方が、所員の助言などを参考にして、自ら課題を完成させるという構成になっています。

講座の日程も前期・中期・後期と 3 回に分かれており、講座で作成した教材を実際に活用し、次の講座で反省点を改善するといった実践と改善の繰り返しが可能となっています。そのため、より目的に添った教材やシステムが作成できるメリットがあります。

(2) 受講生が設定した課題

6 月に行われる前期日程では、各自の課題や目標達成のための方法を確認し、3 回を通した研修計画を立案します。今年度の受講生の設定した課題は、下記のとおりでした。

- ・ 陸上大会の集計システム構築
- ・ 算数ドリル作成
- ・ CGI・SSI を利用したアンケート集計
- ・ 学校運営計画(行事・時数)の作成と管理
- ・ 節づくり(音楽)、平面図形の色塗り(算数)
- ・ グループエンカウンター支援
- ・ 植物、動物図鑑づくり、薬品管理システム
- ・ カバリエリの原理シミュレーション(数学)
- ・ 国家試験対策ドリル制作
- ・ 中学生体験入学時の学科紹介

このように、広範囲な課題が集まり、この後の 2 回の講座とその間の実践を通して大変ユニークな作品が完成しました。



研修者の授業実践の様子

(3) 研修内容

これらの課題に多く見られたのが、わかりやすい教材を作成するために、デジタルビデオカメラやイメージスキャナ、デジタルカメラなどを利用したマルチメディア教材の活用です。単に映像や画像を使用するということから、「わかりやすい教材にするにはどのような画像の処理が必要か」というように

一步踏み込んだ活用方法を考えていました。

また講座中も教材の表現方法などを他の先生方と話し合ったり、より適したソフトウェアの情報交換をし、未知のソフトウェアへも挑戦するなど、研修内容は、教材や表現に合わせたソフトウェアの利用法にまで発展し、幅広い研修になったようでした。

※ 授業風景 ※

アクションデザイン



デザイン画を描いています



2014年

学校紹介のプレゼンテーション

受講した先生方の感想には、「本校でも私が発端となったことで他の先生方も授業でコンピュータを使うようになりました。本講座の研修内容が、先生方にアドバイスする際に大変役に立ちました。」「日常の勤務では得ることのできない時間を与えていただき、大変うれしく思います。自分が作りたかったものを実際に完成させることができました。」といった感想があり、今後学校でのコンピュータ活用が一層進むのではないかと感じさせられました。

2 講座テキスト閲覧サービスのご案内

教育センターで行っている情報教育の講座テキストを教育センター Web ページの情報教育チーム紹介の中で提供しています。提供しているテキストは、平成14年度に使用した講座テキストです。

講座の一覧表や要項ではわかりにくい部分や講座のレベルもこのテキストで理解して頂けるのではないのでしょうか。

またこれらのテキストは、入門用として書かれているので、新しいソフトウェアを自習したいが、市販の参考書は高価でわかりにくいと感じている先生方には、好適だと思います。ファイルは、すべて PDF 形式になっていますので、これらを観覧するには、Acrobat Reader が必要です。お持ちでない方

は、右記 URL からダウンロードし、コンピュータにインストールした後、御覧になるファイルをクリックしてください。 <http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>

3 ソフトウェアライブラリセンターリニューアルのお知らせ

従来からご利用いただいておりますソフトウェアライブラリセンターですが、一部リニューアルしました。内容は、現在教育センターで進めている画像・映像データベースシステムを利用できるようにしたことと、マルチメディア機器を充実させ、マルチメディア体験コーナーを設置したことです。

特にマルチメディア関係は、いままで高価なソフトウェアや複雑な機器が必要であったものを簡素化し、わずか10分程度でデジタルビデオカメラからの動画の取り込みやマイクからの音声取り込み・編集が体験できるようになりました。ソフトウェアも、一般に流通しているフリーウェア（無料のソフトウェア）を利用し、学校に負担がないよう配慮しています。

もちろん作成したデータは、Power Point への取り込みや、学校 Web（ホームページ）への活用も自在です。



ソフトウェアライブラリセンター

教育センターでの研修にお越しの際は、ぜひソフトウェアライブラリセンターをご利用ください。

開館時間は、9：00～17：00（土曜、日曜、祭日を除く）です。

また、希望者には、マルチメディアデータの取り込み方法を簡単に説明したテキストも差し上げていますのでお気軽にお訪ねください。

自家焙煎珈琲 極久里

店主 **市澤 秀耕氏に聞く**

県道原町川俣線をクルマで走っていると見えてくる白壁の珈琲店は、週末には順番待ちの列ができるほどにぎわいます。自家焙煎珈琲を扱う、市澤秀耕さんにお話を伺いました。

珈琲店を開くきっかけは…

この仕事を始める前、飯沼村役場で地域振興の企画をしていました。飯沼は農業の村で、農業振興のお題目を唱えていたわけです。私は、割と規模の大きい農家の跡取りです。自分が農業をやらないで他人に農業をやれといえるか。自分の農業経営をきちんとやるのが、自分に課せられた課題なのではないかと思いました。

飯沼村というのは自然環境が非常に厳しくて、農業経営が容易ではありません。農村景観を利用して、お客さんを呼び込んで自立できるような経営ができないか。きちんとした商品で人を引きつける力がなければお客さんにわざわざ来てもらうことはできません。モデルケースを探している時にたまたま見に行った店が、富山の立山連峰の見えるところで、田圃の中で本当に田舎なのに、土日には県外からもお客さんが来て行列ができる。「あ、これなら」と思いました。

いいコーヒーを提供するために…

東京パツハコーヒーのマスターで、自家焙煎の第一人者でもある田口護先生から、コーヒーについて学びました。コーヒーの本質を教えてもらえる人に出会えたのは、とても幸運でした。

コーヒーは、品質もちろんですが、鮮度がとても大切です。いい豆を仕入れて、ハンドピックをして、上手に焙煎して、新鮮なうちにお客さんに届ける。ハンドピックというのは、虫食いの豆



や腐った豆を手で取り除くことです。たいへんな作業ですが、いい豆を作るための生命線です。

生の豆がどうできるのかを知りたくて、コーヒーの産地

にも行きました。本やテレビではなく、自分の目で見ていろいろ体験したことは、実感として話せるので非常に強い。カフェの文化を知りたくて、ウィーンにも行きました。たくさんのカフェがあって、中には200年くらい続いているお店があって、飾り気はないんだけど、きちんとしたい商品が出ています。コーヒーにしてもお菓子にしても。いいコーヒーといいパン、ケーキをいいサービスで出すことを店の方針にしています。

伝えたいことは…

私の場合、ここで生きていくために何をどうやっていくかというのが基本にありました。農業を基盤にしながらやれるような経営スタイルを実践したい。やればできるということを実践して、他の人が意欲的にやれるようになればいいなと思います。

今、就職難で見方によってはたいへんな時代なのかもしれませんが、逆にみると本当の生き方をするためにいい時代なんじゃないかと思うんです。安定した職業というのも一つの選択肢としてあると思いますが、いろんな生き方があって、自分で独立するというのも必要ではないかと思えます。学校教育だけでなく家庭教育も含めて、教育の基本というのは、知識を豊かにするだけではなく、自立すること、自分で生活できるようにすることを教えることではないかと思えます。

普段の授業でパソコンを

2年 算数科「かけ算(1)」

原町市立高平小学校 教諭 鈴木 供子

I 研究の趣旨

今まで単元のまとめや復習としてドリル的にパソコンを使う授業を実施したことはあるが、わざわざパソコン室に行かなければならなかった。低学年を担当しているので、普段の授業をパソコン室で実施することはノート指導の面からも自分の授業の組み立て方からも(担任のパソコンに対する力量の面からも)難しい。しかし、パソコンに食い入るように見つめている児童の目の輝きはすごいものがある。

そこで、毎時間とはいかないが単元全体を通して使える教材を作ることによって普段の授業にパソコンを導入した授業ができれば、児童の授業に対する関心が高まり、基礎基本の定着にも効果があるのではないかと考え、その視点で教材研究を進めた。

担任する教師が指導するためならば、教科書をスキャナで読み込んでも著作権の問題にはならないという情報もあって、算数科「かけ算(1)」が実施しやすいように思えたのでその単元を教材化することにした。

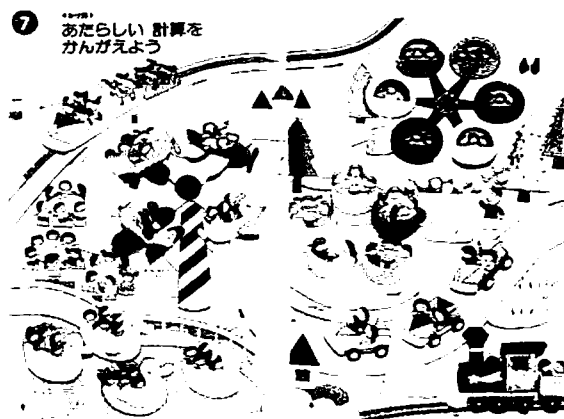
II 研究の内容

1 単元全体を通して使える教材の作成

「Power Point」を使用。教科書の挿絵をスキャナで読み込み、加工して活用する。

(1) 「単元のとびら」の作成

単元のとびらの遊園地の挿絵にリンクをはり、各段にとべるようにしてとびらの挿絵をもとに九九を考える時間にも活用できるようにする。



〈引用文献〉新しい算数2下(東京書籍株式会社)

(2) 各段の「九九の構成」ページの作成

教科書の挿絵を加工してアニメーションを活用し、動きや音を選んで入れる。九九の答えを確認するときに使うことを考え、答えの数値も入れた。

また、アレイ図をトリミングして何枚も重ね合わせ、カーテンが動いているように見えるよう工夫した。

2 実際の授業を通して

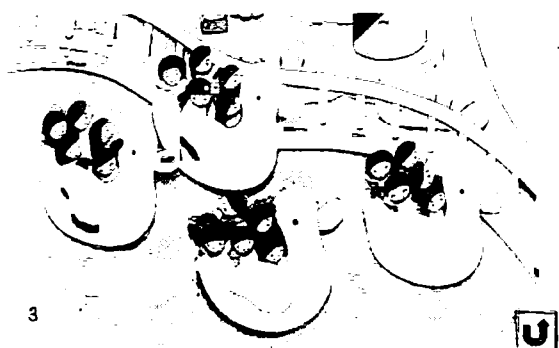
(1) 「単元のとびら」

① 単元の導入として

「うわあ、映画みたい。」と歓声が上がった。教室のスクリーンを使った授業が初めてだったせいもあり、児童の興味を

ひきつけることに成功した。

- ② 新しい計算の考え方のとらえ方として
 乗り物に乗っている人数に着目して、
 コーヒーカップ以外はどの乗り物も同じ
 数ずつ乗っていることにすぐ気づくこと
 ができた。教科書と同じ絵であることに
 気づいた声も聞こえたが、全員がスクリ
 ーンを見て数えていた。



1そうに□人ずつ□そう分で□人

〈引用文献〉新しい算数2下(東京書籍株式会社)

児童が発表した乗り物をクリックして
 その乗り物をアップにし、「1台に□人ず
 つ□台分で□人」を確認することを繰り
 返したので、同じ数同士の足し算は掛け
 算という新しい計算でできること、その
 ほうが便利なこと(2年生にとって理解
 するのに抵抗が大きいだろうと考えてい
 た事項)がスムーズに理解できた。

- ③ 各段の導入として

5の段・2の段・3の段・4の段の順
 に九九を構成する時間があるが、その時
 間の導入として単元のとびらの遊園地の
 挿絵をそのつど活用した。単元を通して
 遊園地の乗り物の人数で考えるので、最
 初の5の段・2の段くらいまでに構成の
 仕方が全員わかり、次々に自力で解決で
 ける見通しを持つようになった。そのた

め、児童は意欲的にぐんぐん自力解決に
 取り組んだ。

- (2) 各段の「九九の構成」ページ

本格的な自力解決学習は、本単元が初め
 てであり、見通しを持った自力解決はもち
 ろん、その発表の仕方もわかってもらいた
 いと思っていたので、構成の時間には同様
 の流れで学習を進めた。

- ① 5の段・2の段

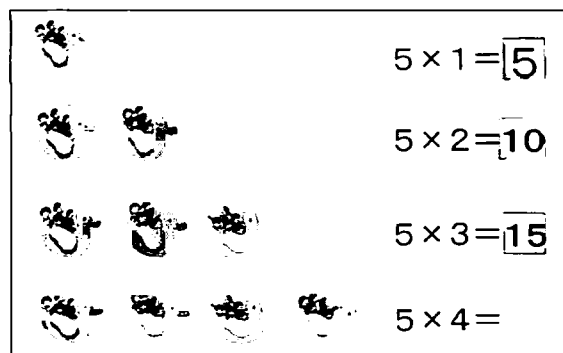
初めてなので、構成を考える方法とし
 て抵抗なくできそうな、

・絵で ・丸で ・足し算で

の3つの方法から好きなものを選び、自
 分なりの書き方で取り組ませた。

児童一人一人がその段の九九を作成し
 た後に黒板の前で自分が取り組んだ方法
 を発表する時間を設けたので、その準備
 を兼ねて、自力解決のときに自分の考え
 をB4の上質紙にフェルトペンで大きく
 書くようにした。

初めての取り組みなのに、自分の決め
 た方法で解決する児童の姿を見ていっば
 いほめてあげたいと思ったが、発表後に
 確認の意味で下のような画面を見せたら、
 児童の意識は全て画面にいつてしまった。

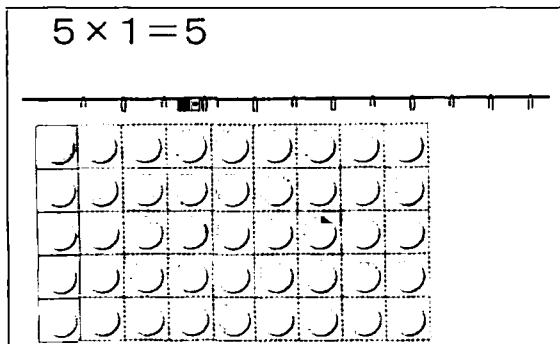


〈引用文献〉新しい算数2下(東京書籍株式会社)

乗り物に合わせたアニメーションによ
 る動きと効果音の影響もあると思う。印

象に残るようにと考えて工夫したつもりが、予想以上に画面の訴える力が大きすぎたようだ。

また、丸で考えた児童をほめながらも下のような画面を見せ、縦にその段の数だけ丸を書くと「アレイ図」になることを知らせた。



〈引用文献〉新しい算数2下(東京書籍株式会社)

2の段からは「アレイ図」で構成する児童が出てきた。

② 3の段・4の段

九九の作り方がわかり、時間内に1つの方法ができた児童は別な方法にも取り組むようになった。丸で書く方法を選んだ児童は、全て「アレイ図」で書こうとしていた。

考えの発表の仕方も回を重ねるごとに上手になり、発表者に選ばれたがる児童が増えたのはうれしい成果だが、確認の際にパソコンの画面を写すと発表者の良さがかすんでしまった点が残念である。

自力解決学習の一環として発表した内容を徐々に練り上げに生かして生きたいと思っているので、発表者の良さをもっとアピールしたかった。改めて視聴覚機器の活用の仕方の難しさを感じた。情報は、目から90%、耳から5%、その他から5%入ると言われているので、安易に

画像を見せるのではなく、かなり意識して使わなければならない。

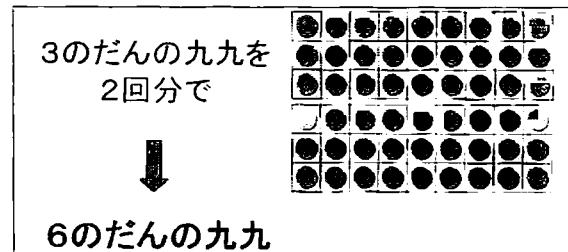
Ⅲ 課題とその対策

「かけ算(1)」の授業を通して強く感じたことは、『パソコンの画像を活用しながら、発表者の考えの良さを聞いている児童にアピールしたい。』ということである。

その対策として考えてみたことを「かけ算(2)」の授業で試してみる事にした。

対策1 画像にして準備するものを絞る。

- ・導入の挿絵
- ・児童が考えつかないだろうと予想される方法(補足的に紹介するため)



〈引用文献〉新しい算数2下(東京書籍株式会社)

対策2 児童もスクリーン上で発表する。

(パソコンの画像と同じ土俵で)

そのために実物投影機を液晶プロジェクターにつなぎ、今までと同様に上質紙にフェルトペンで大きく書いたもの(鉛筆で書いたものを事前に写してみたが、ぼやけた)を写して説明させた。

その結果、実物投影機を使った説明は、同じスクリーン上なのでパソコンの画像と印象が同レベルになったように感じた。また、説明をよりわかりやすくする上でも効果的だった。

この他にもいろいろな方法があると思うので、今後も児童の思考を支援する効果的な視聴覚機器の活用の仕方を考えていきたい。

平成15年度 福島県教育研究発表大会報告

ふくしまの“まなび”を共に創ってみませんか？

平成16年2月13日(金)、「平成15年度福島県教育研究発表大会」を福島県文化センターと福島市音楽堂の2会場で開催した。(参加者数480名)

高城俊春教育長はじめ、矢部清孝福島県小学校長会長代理、富田孝志福島県高等学校長協会長のご臨席のもと、開会行事を行った。全体会では、東京大学名誉教授・ムシテックワールド館長の養老孟司先生に「これからの社会、これからの教育」と題して講演をいただき、続いて、小学校と教育センターの全体会発表が行われた。午後は4分科会5会場に分かれ30の研究発表が行われた。



〈全体会発表〉

基礎・基本の確実な定着を目指す指導と評価の一体化

～算数科の指導を通して～

いわき市立田人第二小学校 教諭 加藤 裕紀

- (1) 診断的評価の診断的活用による単元指導前の十分な準備
- (2) 形成的評価の診断的活用による単元指導中の個に応じた指導

- 3) 既習内容の確実な定着を図るための単元指導後の総括的評価の診断的活用

こうした研究を通して、評価規準の具体や評価方法などの見直しと改善を図り、評価の診断的機能を効果的に指導に生かすことにより、児童の学習状況を的確に捉え、より力を伸ばすためのきめ細かな指導を行うことができたという実践が報告された。



「ふくしまの学習意識」に関する調査研究

県教育センター 所員 中目 雅彦

一人一人の児童生徒に「確かな学力」を身に付けさせることの重要性とともに、学びへの意欲や学ぶ習慣を身に付けさせる必要性が指摘されている。そこで、本県の児童生徒の実態を把握するために、①生活状況 ②学習に関する意識 ③保護者の子ども観 ④保護者の教育行政に対する要望の4観点19項目の調査を、児童生徒とその保護者5,076名を対象に実施した。今後5年間の経年調査により、児童生徒と保護者の実態に迫る調査分析を行いたいという報告がなされた。

〈分科会発表〉

【第1分科会】学校評価・教科外教育

新しい学校文化の創造（第4年次）

～「学びの連続性」と「関わり」～

郡山市立芳山小学校 教諭 増子 春夫

子どもと教師の思いや願いを融合させ、関連性、連続性、発展性を持たせながら学級ごとのテーマを追究してゆく「学級文化の構築」、異学年子どもグループによる「かおりの活動」、さらに、これらを支える学校の営みとしての『プラン2003』によって、「新しい学校文化の創造」に取り組んだ3年間の実践が報告された。

地域の人々と共に育む道徳教育の推進

～仲間や家庭、地域と共によりよく生きようとする子どもの育成をめざして～

本宮町立本宮小学校 教諭 佐久間葉子

文部科学省・道徳教育推進校として「地域人材を活用した道徳教育」の研究に取り組んだ。道徳教育計画を見直し、3つの力（自己の可能性に気づきそれを伸ばしていこうとする力・仲間や家族、地域とかかわる力・自己をみつめ道徳的価値を自覚し、自らを発展させていく力）を高めるために、地域人材の活用を図り、家庭や地域と一体となって道徳教育に取り組んだ実践が報告された。

パラダイム転換による創造的な儀式的行事の再建

～感動が湧き上がる卒業式を自分達で創り上げた生徒たちの軌跡～

郡山市立守山中学校 教諭 新野賢一郎

儀式的行事（卒業式）を道徳的実践の場と位置付け、生徒の主体的な活動の在り方を模索し、生徒自身の自己実現と望ましい集団形成、達成感やその誇りから生じる高次の感動を味わえる

卒業式の創造に関する実践が報告された。

共に学び、共に育つ児童の育成

～横断的・総合的な授業実践をとおして～

福島市立福島第二小学校 教諭 小川 尚子

全教育活動において、「共に学び、共に育つ」児童の育成をめざし、年間教育活動を再編した。各教科、道徳、総合的な学習の時間等において横断的・総合的な授業実践を行い、人間尊重の精神を基底にした学習を繰り返し展開することで、より深く自己を見つめ、人間としての在り方や生き方を考える児童の育成を図る実践が報告された。



学校評価システムの構築と学校改善

県教育センター 所員 村上 正義

矢祭町立関岡小学校 校長 佐久間裕晴

県教育センターからは、学校経営・運営の在り方を改善するための「学校評価」との観点から、『学校経営・運営ビジョン』と『実践・改善報告』を柱とする学校評価システムの構築について研究報告がなされた。

続いて、研究参加者を代表して、矢祭町立関岡小学校の実践が報告された。この中では、「評価・調査票」の評価項目を全教職員で検討することで、教職員の評価意識を高め、また、授業力の向上と教員自身の評価意識を高めるために、週指導計画（週案）を改善し、計画・実践・評価・改善のスムーズステップ化を図った取り組みが報告された。

【第2分科会】生徒指導・教育相談

校内あげての自己肯定感づくりの指導援助事例

～自己肯定感が持てずに、いじけたりパニックに陥ったりするA男への指導援助を通して～

福島市立南光台小学校 教諭 金成 桂子

校内組織を生かし、自己存在感や成感を与える手だてやかかわり、母親への働きかけ、学級生活アンケート（QU）や人権教育（CAP）の実施により、対象児童の心の成長や自己肯定感が高まり、よりよい友達関係の見通しが持てるようになったこと、母親のかかわりにも改善が図られた指導援助事例が報告された。

生徒指導主事による学級担任支援事例

～面接相談やグループエンカウンターを中心に～

会津若松市立行仁小学校 教諭 米畑 健一

自己存在感を持てずに問題行動を重ねる児童に対して、生徒指導主事をコーディネーターとしたコア援助チームを組織し、面接相談やグループエンカウンターの実施、教頭を中心とした保護者への啓蒙等、組織的な指導・援助を行うことにより、学級担任への支援が図られた実践が報告された。

スクールカウンセラー配置による校内教育相談体制の推進

福島市立蓮葉中学校 教諭 青柳 茂宏

スクールカウンセラーを活用した校内教育相談体制を推進し、ソーシャルスキルトレーニング（SST）等不適応の生徒へのきめ細かな働きかけ、教職員・保護者への助言、指導援助等により、相談室等登校から教室に復帰した生徒等の改善が図られてきている実践と課題が報告された。

学校敷地内全面禁煙の取り組み

県立石川高等学校 教諭 鈴木 宗徹

最近のたばこ分煙化の情勢を先取りし、教職員の理解を取り付けて学校敷地内全面禁煙に取り組んだ経緯と、学校内の健康環境作りが進む中で喫煙指導生徒の減少や地域の学校を見る目の変化等の成果が見られていること等、学校としての取り組み全体の中での敷地内全面禁煙の位置付けが報告された。



生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究

～学級（ホームルーム）活動を中心に～

県教育センター 所員 白土 俊和
いわき市立立泉中学校 教諭 赤津 雅彦

小学校第2学年、中・高等学校第1学年を対象に、学級（ホームルーム）活動の時間の「生きる力を育てる授業実践プログラム」を直接参加の研究協力員と教育センター所員で共同開発し、間接参加の研究協力員の意見を採り入れながら、県内各学校にWebページやプログラム集として提示し、普及を図った研究の概要が報告された。また、中学校の実際例として、校内の現職教育研究テーマに位置付けて取り組んだ具体的なプログラム実践の一端が発表された。

【第3分科会】情報教育・情報活用

「教育用コンテンツを活用した授業実践モデルの開発と研究」

県教育センター 所員 鈴木 稔

「ITを活用したわかる授業」を一層普及させるために①ITを活用した効果的な授業実践モデルの開発についての中間報告と授業研究を通して確認できた効果や配慮事項等の成果と課題、②授業で活用できるWebサイトの集約・検証・公開、③14年度までに収集した市町村ごとのコンテンツ量の平準化、④膨大な資料を教育ボランティアを活用して校種、教科ごとに分類したこと等、について発表した。

ITを活用した総合単元的な道徳の授業の試み
～「少年Aについて考えよう」の実践を通して～

国見町立大木戸小学校 教諭 吉田 聡

ITを活用した総合単元的な道徳の授業の試みにより、児童は情報の収集、発信、話し合い、まとめ、発信という一連の学習活動を通して、犯罪については人それぞれとらえ方が違うということに気づき、さらに自己評価しながら、規範についての意識を高めることができたこと、また学習過程の内容を保護者に発信しながら児童と話し合う機会を設けたことで、道徳教育について家庭における啓発が図られたのではないかと、といった成果を発表した。

中学校数学「三平方の定理」

～Web上のシミュレーション・プログラムを利用して～

福島市立茂庭中学校 教諭 永倉 久

Webページ上で効果的な2つのシミュレーション・プログラムを見つけることができたことで、考察する時間が多めに確保され、なおかつ「なるほど」と生徒が納得できる授業が展開できたことやLAN上でキャッシュをかけたパソコンを教室に持ち込むことで、普通教室でWeb

ページを活用した授業を行うことが可能になったという成果を発表をした。

高校生物「植物群落」

～衛星画像とインターネットを活用した授業実践～

県立坂下高等学校 教諭 高橋 宏之

授業の実施時期によっては落葉や積雪等によって正確な調査が出来ないことから、植生調査に代わるものとして衛星画像、植生図、植物図鑑、Webページ等を利用して生徒に身近な地域の植生についての理解を深めさせる調べ学習を行った結果、内容が理解でき分かりやすかった、積極的に取り組めたという生徒の感想が大半を占め、ITを活用することで植生の理解を深める成果はあった、ということを発表した。

学校におけるWeb活用

～継続して運用するための一提案～

会津若松市立第五中学校 教諭 岩本 和典

誰でも簡単にWebページを作ることができれば知識、教材の共有化や精選が進み、より高い教育実践につながるができることと考え、Webページを実際に作ってもらった実践報告や引き継ぎが容易となる運営手順のマニュアル化についての一試案を発表した。

情報機器やネットワークを活用した新たな学習形態に関する基礎研究

～eラーニングの利用に関して～

県教育センター 所員 阿部 洋己

eラーニング教材の作成と有効性に関する実践研究を行い、eラーニングが個別指導や発展的な学習教材としての活用に大きな期待がもてること、個々の学習者にとっては興味関心が高まり学習内容の定着に対して有効であること、学習記録の累積をサーバ等に残すことで教師の補助資料としての活用が可能であること、といったことについての発表を行った。

【第4分科会】カリキュラム・教科教育

思考過程を重視したきめ細かな学習指導を充実させるための工夫

県教育センター 所員 大和田一成

総合問題・学習意識調査・教研式標準学力検査実施結果の分析を通して、生徒の実態と今後の課題を明らかにした。また、国語・社会・理科それぞれの教科の立場から、問題解決能力の育成に向け、思考過程を重視した学習指導の手立てが具体的に提示された。

学びを創造することのできる生徒の育成(第1年次)

～実感、納得する学びへの支援と評価～

郡山市立郡山第二中学校 教諭 児玉 剛明

学びを「生徒が主体となり、全身全霊を傾け、自らの知を広げ、深め、その広がり深まった知で新たな事象に接し、新たな心の動きを体感する場」と定義した。こうした学びを自ら創造することのできる資質や能力の育成をめざして、各種調査結果を踏まえながら生徒主体の学習活動や支援と評価に取り組むことにより、教科の本質的な学力の再認識と授業改善への方途が見出されたとの報告がなされた。

基礎学力の定着を図る学習指導のあり方

～指導の個別化の工夫～

石川町立石川中学校 教諭 安田 良一

習熟度別学習の導入にあたり、2学級に習熟度に応じた3コース設定→各コースの内容を生徒・保護者に説明→生徒からの希望調査と個別相談→生徒選択によるコース決定という手順を踏んだ。到達状況に応じて繰り返し学習や発展学習を取り入れるなど授業展開に工夫を加えて、個に応じたきめ細かな指導を充実したことは、基礎学力の向上に効果的であったとの報告がなされた。

「確かな学力」を身につけさせるための個に応じた指導の工夫

～単元構成や学習形態の工夫を通して～

河東町立河東中学校 教諭 荒井 戸内

単元再構成により学習内容の精選と発展的・補充的な学習が可能になった。併せて国語・数学・英語科では単元のまとめの時間にコース別学習やTT指導を設定し、事前・事後テストによる実態把握、オリエンテーションや自己評価カードによる生徒の希望調査をしながら、個に応じた指導を工夫していった。さらに選択教科でもコース設定をし、能力伸長と基礎学力の定着を図ったとの報告がなされた。

電流領域の基本概念の理解を深める学習計画の在り方

～電流モデルの確立と規則性(法則)の検証・一般化を通して～

県教育センター 所員 大野 勝彦

電流モデルを中心にした探究活動を展開して「一方向電流保存型」についての理解を深めさせることができるとともに、生徒自身が考えた回路での再実験により規則性(法則)を検証・一般化することができた。その際生徒の考えを生かしたコース別学習を取り入れたため主体的に学ぶ姿が多く見られ、探究意欲も高まり、電流領域の基本概念の理解が図られたとの報告がなされた。



「意欲的に学習に取り組み、友達との関わり合いを広げながら、楽しんで運動することができる体育学習を目指して」

～単元全体を見通し、ストーリー性を持たせた表現リズム運動を中心に～

会津坂下町立坂下小学校 教諭 渡辺 秀一

単元全体を見通した学習計画の作成、学習内容や指導方法の工夫改善、個に応じた場や支援の仕方の工夫により、柔軟で新鮮な発想で単元や学習内容を提供することができ、子供たちが楽しみながら意欲的に学習に取り組んだ実践が報告された。

聞き手に自分の思いが伝わるよう工夫して話すことができる子供の育成

～「工夫・表現・評価のサイクル」を身につけさせる授業実践～

郡山市立熱海小学校石筵分校 教諭 近野 典男

3つの条件を考慮した単元開発、フィードバックする場の設定により、子供たちが話すことに好感を持てるようになり、自分の思いを伝えるために工夫しようと、進んで考えたり行動したりすることができるようになった実践が報告された。

小・中学校9年間を見通した英語学習の在り方

県教育センター 所員 黒須 智則

英語学習の入門期を小・中学校9年間の大枠で捉え、小学校英語活動の現状分析と問題点、中学校英語学習とのつなぎの現状と問題点について研究した。これに基づいた、小・中学校9年間の英語学習を見通した教育課程編成のあり方についての報告がされた。

子供たちの「確かな学力」の向上を目指し、「個に応じたきめ細かな学習指導」を実施するための基礎研究（算数）

県教育センター 所員 桑名 俊之

学力の実態を、学力到達度や学習スタイルなどによって具体的・数量的に把握した。これにより、平均値による実態把握では見出しにくかった学力層ごとの学習のつまずきや授業改善の視点について研究が報告された。

デザイン分野において、意図に応じた色を選択し、形をデザインする能力を伸ばすための学習指導の工夫

県教育センター 所員 高橋 克之

切り絵によるセルフポートレートの制作において、「色とことばの関係表」や「形とことばの関係表」を活用することにより、色彩計画やデザインの基本方針の明確化、意図に応じた色・形・デザインの選択能力を育成する授業実践について報告された。



学ぶ意味を見出し、空間図形に関する豊かな感覚を 養うための算数・数学教材の製作とその活用の事例

教科教育チーム

小・中・高校それぞれで、質的側面に目を向けた意味のある活動を通した算数・数学の授業が望まれています。

そこで、児童・生徒の発達段階を踏まえ、子ども達に意味のある教材として提示できる「空間図形モデルづくりとその活用」を紹介します。早く、手軽に製作でき、子ども達の学習内容や程度に応じた取り扱いができます。

I 準備物

- ホットクレーガン（スティックを加熱し、溶かす。接着用器具）
- グルースティック（クレーガン用接着材）
- 竹ひご



ホットクレーガンにグルースティックを差し込み、コンセントに入れて準備は完了。2～3分でホットクレーガンの先端が熱くなり、グルースティックがゲル状に溶けて接着剤の役目を果たします。

II 空間モデルの製作とその活用例

1 立方体、直方体

- (1) 小学校3年「はこの形を作ろう」

長さの同じ竹ひごで立方体を、長さの違う3種類の竹ひごで直方体を作ることができます。粘土で竹ひごをつなげる場合よりも接着部分がしっかりしているので、取り扱いも手軽です。

〔活用例（観察、構成）〕

立方体や直方体を作ります。「さいころの形をしたはこを作るには何本の竹ひごが必要ですか」「ティッシュ箱のような形のはこを作るにはどのくらいの長さの竹ひごが何本必要ですか」など、児童に問いかけながら、それぞれの立体の辺の数や位置関係を考えさせてみましょう。その後、あらかじめ先生が製作したモデル（3～4人に1つ）を提示して児童に確かめさせます。

空間図形の構成要素である「辺」の数とともに辺どうしの位置関係にも気づくことができ、数量や図形についての豊かな感覚を持たせることもできます。

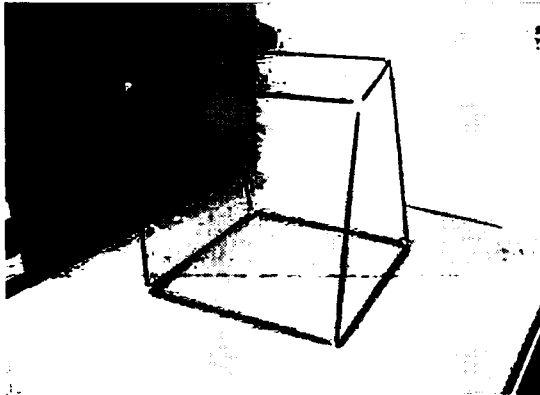


- (2) 小学校6年「面や辺の垂直、平行」
中学校1年「直線や平面の平行と垂直」

〔活用例（製作・観察）〕

実際に、子ども達に直方体を製作させてみましょう。竹ひごで作った立方体や直方体を手にし、辺と辺、辺と平面の位置関係を観察します。

竹ひごで立方体を作ろうとして、中には歪みがでてしまった立体ができてしまう生徒がいます。「立方体と歪んでしまった立体を比べて、辺と辺、辺と面の位置関係でどんな違いがありますか」など、厚紙で作った立方体モデルと自作のゆがんだモデルとを比べ、ねじれの位置や面と面、面と直線、直線と直線の位置関係を直感的に把握することができます。



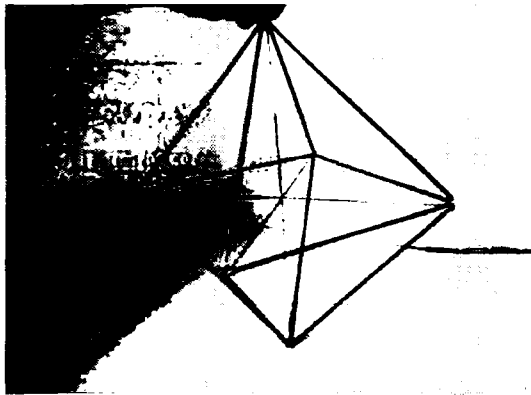
2 多面体・正多面体

(1) 中学校1年「多面体」

高校数学Ⅰ「図形の計量」「相似と計量」

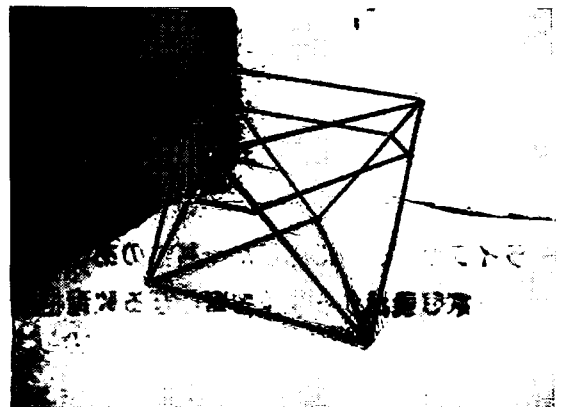
〔活用例（多面体の製作・観察）〕

生徒に多面体・正多面体モデルを製作させてみましょう。できたモデルの観察を通して、辺の総数、1つの頂点に集まる辺の数、各面の位置関係、特に見取り図やコンピュータのシミュレーションでは把握しにくい向かい合っている面や辺の位置関係のほか、空間図形に関する多くの性質を見出すことができます。厚紙で作ったモデルと比べ、空間図形に対する豊かな感覚を養うことができます。



〔活用例（切断面の製作）〕

さらに、正八面体を1つの面と合同な平面で切ったときの切り口の周りの長さを考える学習では、正八面体の立体モデルに、実際に生徒に切り口の辺（竹ひご）を入れさせてみます。そのことにより、どの辺（竹ひご）とどの辺（竹ひご）が平行で、その辺の長さはどのようになっているかなど、問題の意味の把握や問題解決のための思考過程を確認しながら、問題の解決を図ることができます。



Ⅲ 立体モデル製作・活用上の留意点

(1) 製作

- ・子ども達の発達段階と授業のねらいに合わせて、先生が作ったものを観察させるか、製作させるかを考慮してください。
- ・用具の取り扱いについては事前指導を十分に行うとともに、製作中はホットクローガンの先端には直接触れない、製作後にはすぐにコンセントから抜き用具を回収するなど、安全面に配慮して具体的に注意を与えてください。

(2) 活用

- ・授業のねらいを達成させるためには、事前に先生が自作して、子ども達の思考過程をたどることが大切です。

数量や図形についての豊かな感覚を育てるとともに、算数・数学を楽しみながら多くの気づきや新たな課題が生まれる「空間図形モデルづくり」です。校種を問わず活用し、学習効果を高めてください。

実践に役立つ教育資料

— センター所蔵の研究紀要・資料から —

センターで受け入れた研究紀要や教育資料から、教育研究や教育実践に役立つ資料をいくつか紹介します。

インターネットにおける教育実践情報の動向分析—特に総合的な学習の時間の構想を中心に—

国立教育政策研究所(2003年3月)

総合的な学習の時間における体験活動のタイプに関する調査と総合的な学習の時間についてのアンケート調査を行い、総合的な学習の時間の全国的な傾向、単元構成と実践例、評価の在り方と進め方などを研究したものです。

ライフサイクルに応じた一貫性のある教育相談支援

—家庭養育から学校教育に至る教育相談活動を中心に—

国立特殊教育総合研究所(2003年2月)

ライフサイクルに応じて一貫性のある相談支援体制を構築する上で、特殊教育センター、養護学校、特殊学級などが、地域でどのように機能していくことができるのか、そして、各機関との連携はどのように行っていくのかを研究し、地域システムと相談・連携の実際が報告されています。

意識から行動へ—豊かな心の育成に向けて—「心の教育」研究最終報告

大阪府教育センター(2003年3月)

「行動と規範意識との関係」「生活経験と規範意識との関係」「生活経験と行動との関係」を多角的に分析することによって、各校種における規範意識の核と考えられる要素を導き出し、子どもの規範意識の醸成と豊かな心を育むための方策を探っています。さらに、指導(活動)展開例及び実践事例が掲載されています。

複式学級における学習指導の在り方～学年別指導の実践事例～

北海道立教育研究所・北海道教育大学(2003年3月)

複式学級における学習指導上の課題と解決、学年別指導の授業づくりの手順、学年別指導における7つの工夫、学年別指導の3つの実践事例を示しています。児童や学校の実態に応じて、児童一人一人に確かな学力を身に付けさせるための学習指導の展開に生かせる資料となっています。

※ 教育資料の利用については、企画・研究グループ教育調査チーム(内線14番)までお願いします。

平成16年度講座の案内

1 次の講座が新設されます。

「小学校における英語活動のための 指導者講座」

小学校における英語活動の意義を理解し、ALTとのTTをはじめ、児童の実態に合う授業が行えるよう実践的指導力を高める演習を豊富に行います。 (推薦)

「AD/HD の理解と対応講座」

(土曜講座)

各学校で問題となっているAD/HDについて、理論編と実践編の内容で理解と具体的な対応を深めます。1日日程の土曜講座です。 (希望)

「小・中学校における IT を活用した授業の進め方講座」

教科のねらいに即し、ITを有効に活用することで授業の質的改善を図ることを目的に、授業案の作成・検討を行います。 (希望)

「組織マネジメント講座」

校長を対象に、企業や自治体で行われている組織マネジメントの理解や手法をもとに、変化に対応した自校の学校運営の改善案づくり等を行います。 (希望)

2 カウンセリング研修がかわります。

「初任者カウンセリング研修」

これまで校種ごとに行っていた初任者のカウンセリング研修を、小・中・高合同で実施します。教育事務所ごと、カウンセリング入門の内容です。

「学校教育相談基礎講座」

これまでも開設していた教育センター専門講座に、各教育事務所で行われていた「カウンセリング研修会」を統合して実施します。すべての校種の先生を対象とした、カウンセリング初級の内容です。

「学校教育相談実践講座」

基礎講座を受講した先生を対象とした、カウンセリング中・上級の内容です。

平成15年度実践事例集の案内

教育センター発行の「実践事例集」を、今年度から教育センター Web ページに掲載することになりました。

<http://www.center.fks.ed.jp>

今年度は、10の事例を紹介しています。

○小学校……社会・生活・学級活動

○中学校……理科・英語・特別活動

○高等学校……生物・美術

○生徒指導・教育相談

なお、CD等での配付をご希望の方は、教育センター企画振興チームまでお問い合わせください。

R100

本文は複製禁止率100%
白紙率77%の再生紙を使用しています。

「窓」に寄せる思い



— 教育に寄せる心を開く小さな「窓」—
小さな「窓」から広がる教育の世界が見えてきます。